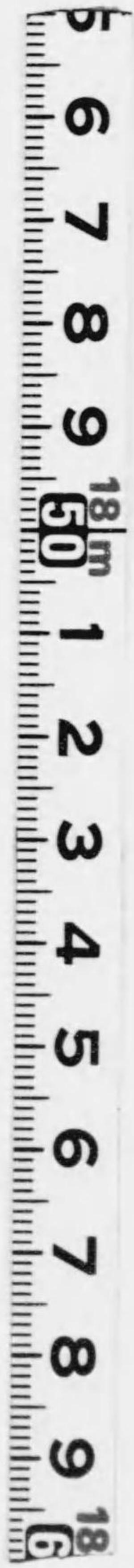


340
36



始



34.4.21



物來
村井知至著

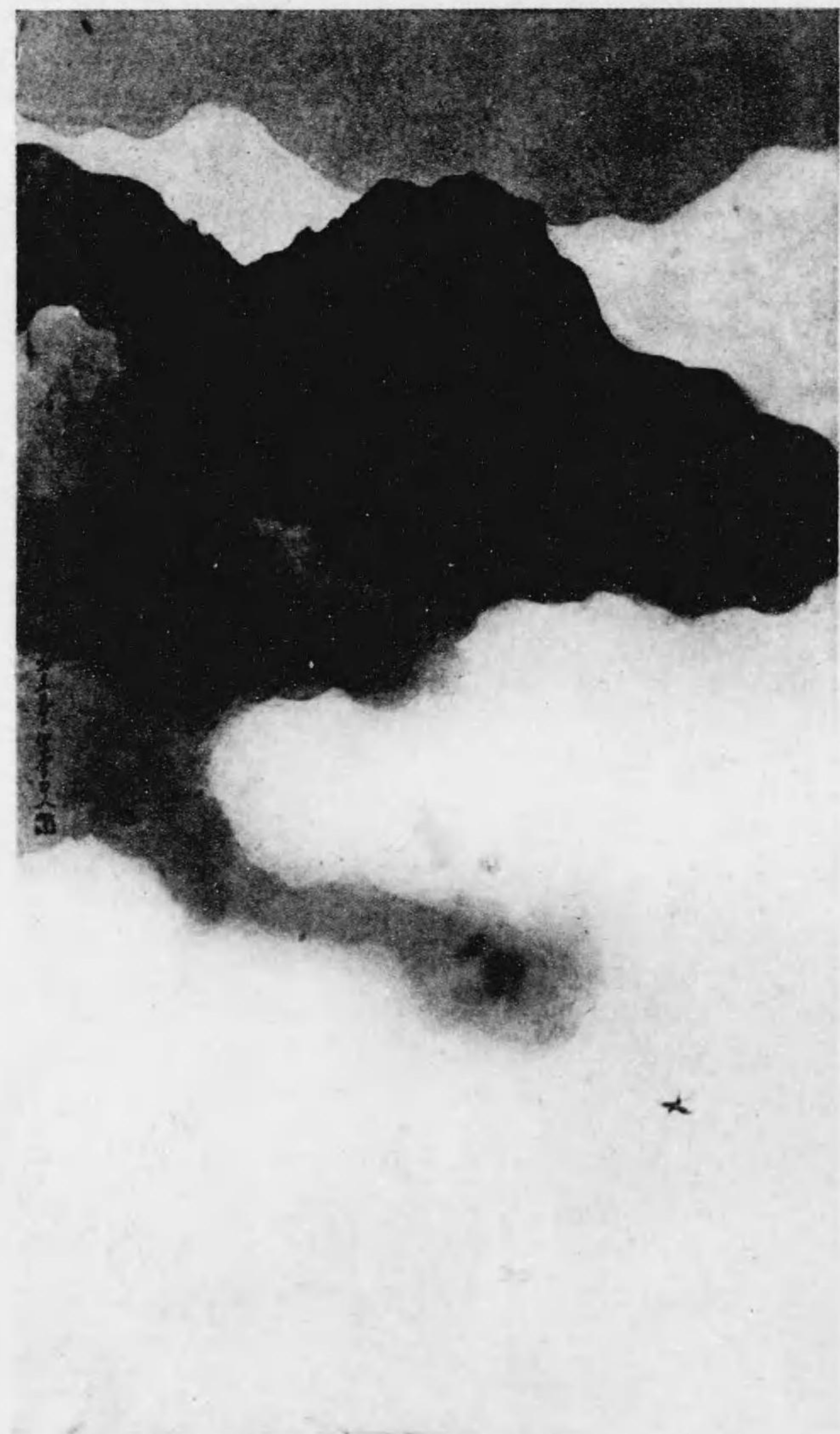
大正
5. 11. 2
内交

序

截然として屹立す萬古の山、崢嶸として天を壓し、寂歴
 として道心を生ず。雲千刃を閉塞して、溪聲天地を籠
 む。鳥無心にして飛んで萬有を究め、峰巒宛轉として
 無限に通ず。誰か聽く天外無聲の聲、誰か彈ず孤獨無
 絃の琴、誰か知る乾坤無住の妙、寂然としてたゞ空々た
 り。帝鄉遂に一人の有、寂漠遂に孤獨の快默然として
 たゞ森嚴に對す。仰ぎ見れば、天宇萬頃、雲飛んで悠々、

(1)

序



(2)

序

俯して見れば碧潭蒼々魚龍寂寞たり。青苔聲を發し、
冷石音を成し、萬象心を通ず。天地自ら聲あり。

大正五年十月

村井物來



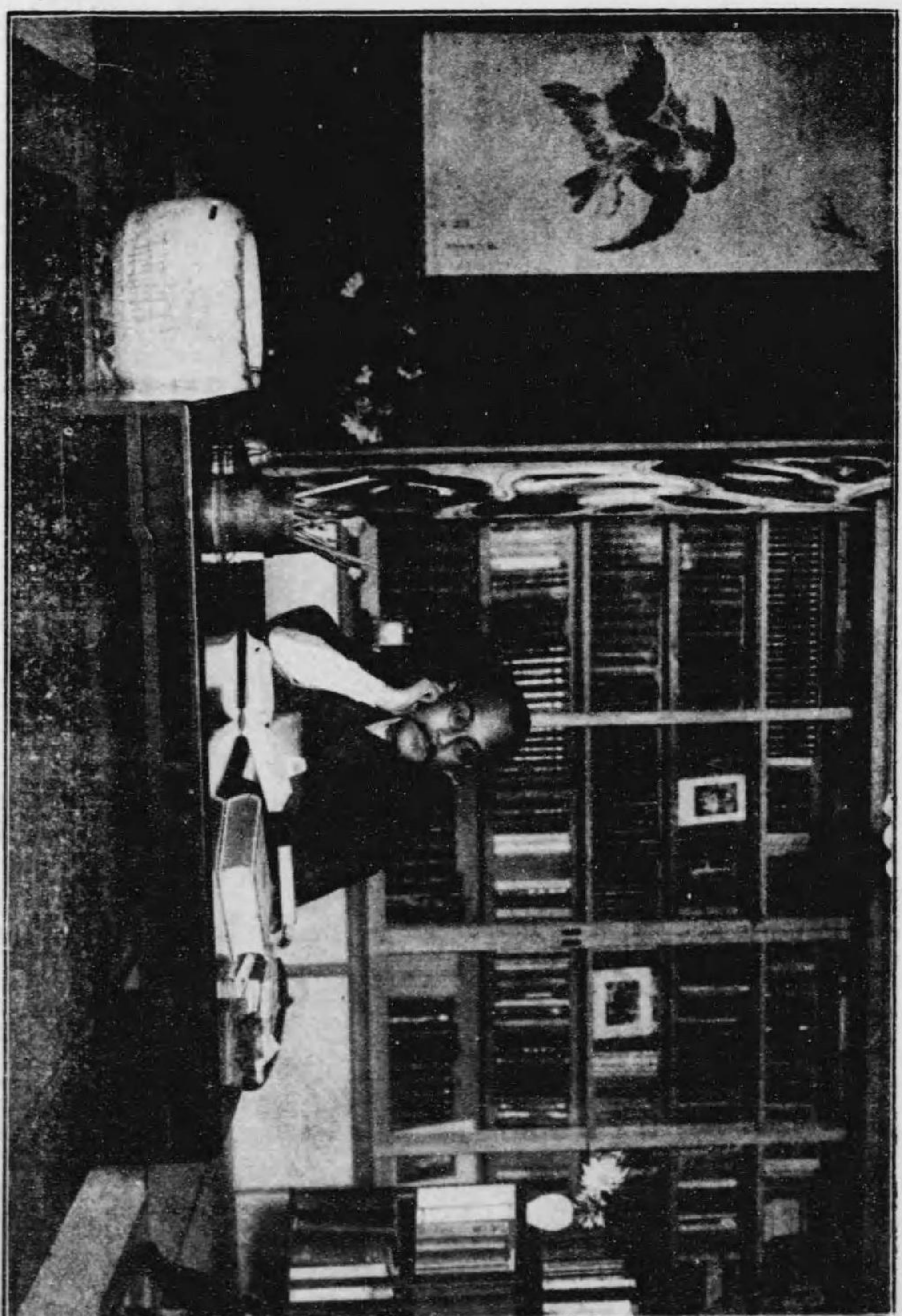
(2)

序

俯して見れば碧潭蒼々魚龍寂寞たり。青苔聲を發し、
 冷石音を成し、萬象心を通ず。天地自ら聲あり。

大正五年十月

村井物來



齋 書 至 知 非 村 來 物

聲目次

聲……………	一	朝の務……………	三二
神は都々逸を唄ひ給ふ……………	四	三ツの資本……………	三三
猫の屍體……………	一〇	墓に行け……………	三三
何れか奇蹟なる……………	二二	孤獨なれば誠實なり……………	三四
無一物これ無盡藏……………	二三	徳化の人……………	三五
『水夫の死』……………	二二	遅讀の人……………	三六
漁夫の生活……………	二五	閃の人……………	三六
霞……………	二七	教師……………	四〇
珠數の修養……………	二九	富士に定姿なし……………	四二
マテリヤルは都て空のみ……………	三〇	一人一神萬神一如……………	四二

(1)
目次

(2)

信仰の冥合……………	四	戀愛……………	五九
プランクベーチ……………	四	返信……………	五九
眞友とは……………	四	鐘……………	六一
冬籠は厭なり……………	四	戀なき人……………	六一
心交の友……………	四	眞剣に笑へ……………	六三
宇宙と人……………	四	靈は叫ぶ……………	六四
なほ幾日ありや……………	五	肉あるが故に……………	六四
大道……………	五	子福長者となれ……………	六四
日誌……………	五	ソクラテスを憶ふ……………	六五
自己と親むべし……………	五	抵抗主義……………	六七
眞理の標準……………	五	一 ノンコムフォミスト……………	六七
愛神……………	五	二 迎合主義……………	六八
		三 恐るべき風潮……………	六八

(3)

四 無氣力の一例……………	六九	獨歩の悲觀……………	八八
五 全世界を得るも何かせむ……………	七〇	偉人と凡人……………	九〇
六 抵抗主義者たれ……………	七一	發憤せよ……………	九一
七 盛信僧都……………	七三	妙の一字……………	九二
八 トルストイ……………	七四	女に道を聴くべからざるか……………	九二
九 基督……………	七四	何を驚かんや……………	九四
得られざる戀……………	七五	自殺か信仰か……………	九四
涕泣……………	七	これなり、これなり……………	九五
蝶……………	八〇	我性の兩極……………	九七
宣言……………	八一	讀め讀め……………	九八
目醒時計……………	八一	人様々……………	一〇〇
乾坤無住同行二人……………	八二	道は傳ふべからず……………	一〇三
人生の趣味……………	八六		
名目……………	八七		

(4)

籐椅子	103	凡てのもの有意義	129
自警	106	生存の事實を知れ	131
我れ已に死せり	108	恐るべきは習慣	131
破門と信仰	113	花よ星よ	133
生前死後	118	我とは何ぞや	134
豚の如く生きて	120	直覺あるのみ	135
外皮のみ	123	書け	136
唯それ信せよ	123	大詩人	137
日誌の人	124	我住家	138
筆の瞑想	126	宇宙の中心	140
宗教の根本問題	127	言葉のみ	141
我が好む書	128	體得せよ	142

(5)

何れかノンセンスなる	142	慣習	152
たゞ靈光のみ	143	老ゆること勿れ	153
何れを擇ぶか	143	竟に消滅乎	154
祈禱	144	主人公	155
神我を識る	145	人心の三門	157
我は信ず	146	子供と人生問題	158
なほ一を有す	147	保守的人物	161
そのホールを知らず	148	天の命	162
『思ふ』	148	疑ひ	163
何	149	心鏡	164
謙遜と尊大	150	瞑目	164
人の心	151	註釋	165

(6)

信仰……………一六六

宗教……………一六六

牢獄……………一六六

未生以前……………一六六

書籍を焼棄せば……………一六九

歴史を葬らば……………一七〇

ブックウォーム……………一七二

理責めの合點は駄目なり……………一七二

科學に呪はれたる愚人……………一七三

盲信……………一七三

無知なるを要す……………一七四

靈を見て靈に戀す……………一七五

宇宙……………一七六

人は靈なり……………一七六

心は天地の前にあり……………一七九

分量を好む國民……………一八一

靈丹一粒……………一八一

驚異……………一八三

習慣の力……………一八六

修養の工夫……………一八七

無字の書……………一九〇

宗教家の定義……………一九二

宗教家の資格……………一九二

一頭の人……………一九二

(7)

二情の人……………一九四

三腹の人……………一九七

趣味……………二〇〇

眞善美の代表者……………二〇〇

賣名の士……………二〇二

隠れたる生涯……………二〇三

神を對手とせよ……………二〇五

沈黙せる第三者……………二〇五

自我主義の權化……………二〇八

たゞのみ……………二〇九

彼等果して富めりや……………二一〇

三偉人……………二一一

今……………二二二

過去、現在、未來……………二二二

神は現在にのみ生く……………二二四

掘れよ掘れ……………二二四

何をか眞人といふ……………二二五

西洋崇拜論者……………二二五

名を帯ぶべからず……………二二六

趣味なきなり……………二二七

知りて感せず……………二二七

完全なる人……………二二八

宿命論の誤謬……………二二九

〇〇〇主義……………二三〇

(8)

子供の喧嘩	二二二	短命は天才の恩賞	二二〇
死	二二三	病者の言	二二〇
我憂ひ	二二三	皆虚偽なり	二二二
宗教とは	二二三	迷はしむるもの三	二二二
意義ある生活	二二四	讀書解	二二二
人情の美	二二四	先づ自殺せよ	二二三
夢消する戀	二二五	偶像崇拜	二二四
信仰あらば	二二六	偶像	二二四
價值ある生涯	二二七	天爵主義	二二五
あなたまかせ	二二八	人は永久の靈	二二六
我生命	二二八	不思議	二二七
眞理	二二九	煩悶せよ	二二八

(9)

現在に生きよ	二二九	我佛尊し	二二八
熱烈に信せよ	二三九	珠玉土芥のみ	二五〇
眞面目の生活	二四〇	誠徳	二五三
人物養成所	二四〇	雉子の聲	二五八
人生の意義如何	二四一	神宿る人	二六〇
神曰く	二四一	最も好きなもの	二六一
女を弄する者	二四二	天才は容れられざるか	二六二
除去せよ	二四二	女郎花	二六三
時は來れり	二四三	土塊一片	二六六
一 沈黙せる第三者	二四三	これ寢言のみ	二六八
二 收穫の時	二四四	需むるはたゞ愛のみ	二六九
三 目を擧げて見よ	二四六	深甚なる要求	二七〇
四 共に喜ばん	二四七		

(10)

醜の醜なるもの……………二七二

實行……………二七三

物質は勢力の塊……………二七四

奮闘せよ……………二七四

火……………二七五

自然の情か……………二七六

上に上あり……………二七六

聖人の道……………二七七

聖人と凡人……………二七八

定は心の本體……………二七九

病死も亦變死……………二八〇

漸を追ふべし……………二八一

羨む勿れ……………二八二

Outgrow……………二八三

鳥の生涯……………二八五

宗教家の名も亦狭し……………二八六

人間進歩の極致……………二八七

紳士と志士……………二八八

祈禱は呼吸なり……………二八八

二重の耳……………二八九

教育家として宗教を説かむ……………二九一

聖者の心……………二九二

雲と水……………二九四

セコンドハンドの宗教……………二九四

(11)

悟と信……………二九六

米人氣質の一……………二九七

第一人……………二九八

嫉妬と愛……………三〇〇

醜と美……………三〇三

表と裏……………三〇六

一個半箇の罪人……………三〇九

人生終に如何……………三一〇

天……………三一四

遂に言ふべからず……………三一五

修徳愛隣の一に歸す……………三二六

一……………三二六

宗教と火……………三三三

一……………三三三

二……………三三五

三……………三三六

レヴェレーション……………三三七

一 思想の二種……………三三七

二 天啓……………三三八

三 最近の經驗……………三三九

四 神は無警告にして來る……………三三〇

靈眼……………三三二

一 眼……………三三一

(12)

二 盲啞學校	三三五
三 眼鏡	三三七
四 蟬脱	三三九
純なる心	三四二
吾人の存在	三四五
欺かれんか	三四七
靈の力	三五二
生の空費	三五二
欄干	三五三
無知に還れ	三五四
眞に偉大なる人	三五四
身騷なれば	三五五
見神	三五五
我が心證	三五六
信は生命也	三五七
物の中に神を見よ	三五八
彼等悟れるか	三五九
犠牲	三六〇
年賀状	三六〇
神と偕に	三六一
ナニ髻位	三六一
我は二人也	三六三
狐なりけり	三六三
予が三大綱領	三六四
狂人とや云はむ	三六五

(13)

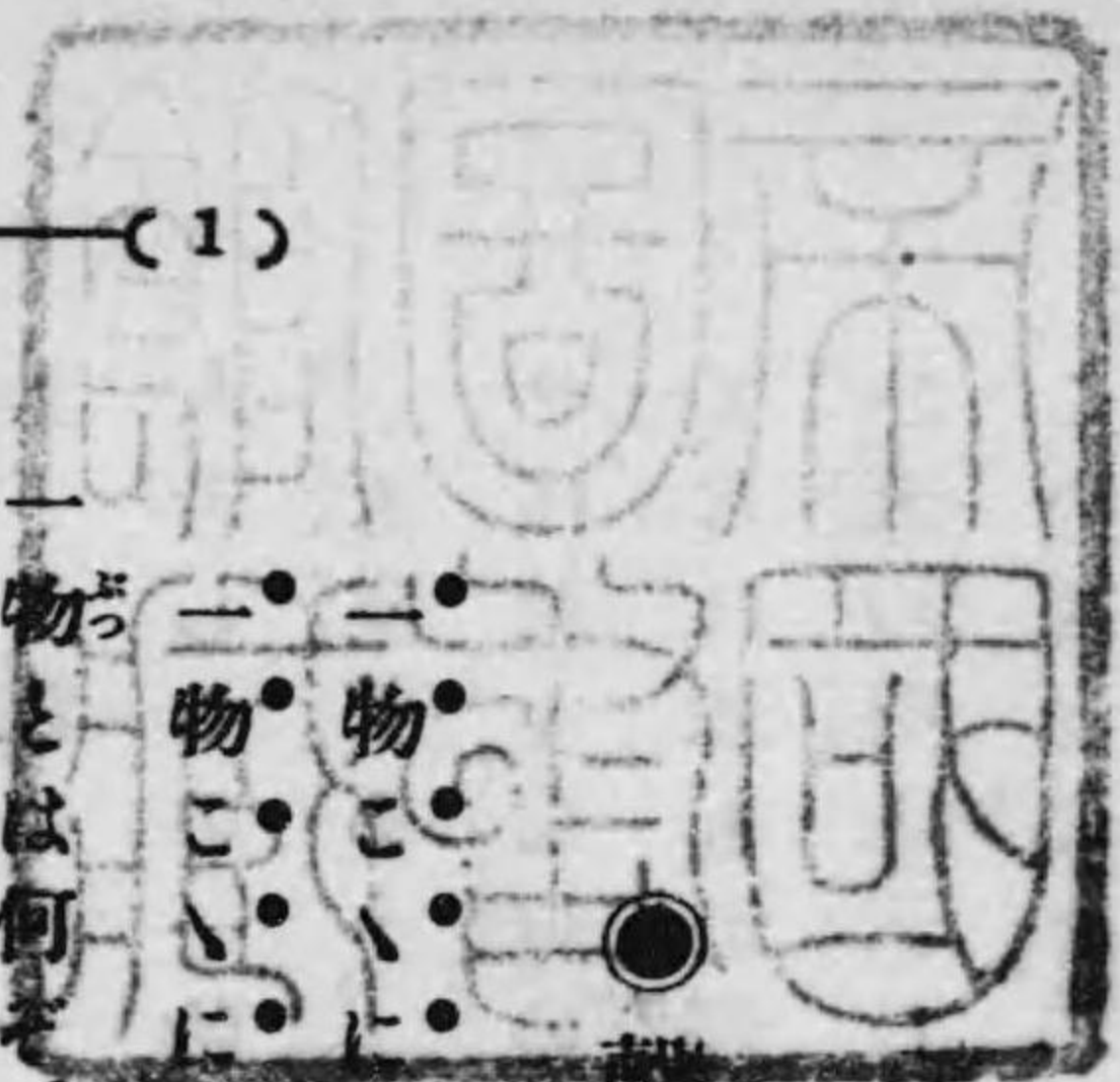
神祕なる哉	三六七
思想のテキスト	三六八
自然に背く勿れ	三六八
大偽善者乎大聖人乎	三七〇
言論を禁せらるゝも	三七〇
△△ツカイ	三七一
無絃琴	三七二
昏倒せむ	三七二
田舎と都會	三七三
知らざるのみ	三七三
趣味なき人	三七四
信條なき宗教	三七五
決心は事實也	三七六
自然は萬能の醫師	三七六
病も亦賜物也	三七七
始めより孤獨なり	三七六
以て光榮とす	三七九
これ偉人なり	三六〇
至誠	三六〇
宗教の二方面	三六一
天地の大廟	三六二
信念	三六四
無名の大道	三六五
心の瘡痕	三六六

(14)

宗教の門外漢	三六七	蛙人	三九〇
寂寞なる生活	三六八	物來	三九四
靈化せよ	三六九		

聲目次終

聲



物來 村井知至 著

(1)

一物こゝに宿る。誰かこの一物を看る。
 一物こゝに物言ふ。誰かこの聲を聴く。
 一物とは何ぞ。曰く、言ひ難し。たゞそれ、この物我中に在りて生動す。これ我力なり。我生命なり。その潜むや小なること芥子種の如く、その發するや大なること乾坤に充つ。この一物極めて貴し。日月

(2)

左右に坐して、我をして黙せよと云ふも、我は黙すること能はずとの確信は、この一物の賜物なり。ヲルムスの屋瓦、悉く悪魔と化して我を襲ふとも、我は往かざるべからずとの勇氣は、實にこの一物の賜物なり。人若しこの一物を握らば、天下のことそれ何事か成らざる。

天空聲あり。仰げばたゞ星光の燦たるあるのみ。地底聲あり。俯せばたゞ荒原の漠々たるあるのみ。風なく鳥蟲鳴かず、萬籟音を收めて、なほ然も心韻に觸るゝ天地の聲あり。人これを呼んで神の聲と云ひ、天の聲と云ひ、又靈の聲といふ。されど誰かこの聲に接したる。人、この聲を聽きて歡喜あり、慰安あり、平和あり、力あり、生命あり。斯の如くにして人生の意義自ら釋然たり。人この聲を聽きて初めて一物を握る。一物を握つて初めて一物を看る。一物を看て初めて生に接す。煩悶、懊惱、不平、懷疑、邪欲、淫心、皆これ天地の聲を聽かざる人の迷ひの

(3)

み。天地の聲は無聲の聲なり。無音の音なり。その形なく又聲なきが故に人容易にこれを信せず。されど心を靜かにして我を去り、妄念を棄て、無念無相の境に入れば、聽かざらんと欲するも心耳に響く天地の聲あり。これ神の聲なり。天の聲なり。靈の聲なり。而してこの聲の外に發したるもの、これをフラッシュ、オプ、ソート(思想の閃光)と云ひ、この聲の内に反響せるもの、これをインスピレーション(靈感)といふ。この聲以て信すべく敬すべく尊ぶべし。

世の宗教なるものは、要するにこの聲を聽かんが爲の一方便のみ。腹に一物を握らむが爲の一手段のみ。腹に一物を握つてこの一物の聲を聽く人に取りて、宗教竟に何するものぞ。この一物即ち宗教なればなり。

あゝ、滔々たる浮調輕薄の今の世に、誰か靜かに我を省みて、無聲の聲

を訊ぬる者かある。言ふまじ言ふまじ、人生は竟に孤獨なり。我は一人を悦しんで孤獨を味ひ、靜かに一人考へ一人思ひ一人案じて、俗中に天地無韻の聲を聽かんかな。

(4)

●神は都々逸を唄ひ給ふ

神は都々逸を唄ひ給ふ。

世の宗教家は、之を以て神を穢すの語となすべし。然れども之れ否むべからざる眞の言なり。

神は、世の凡常宗教家の思惟するが如く、然く嚴格なるものにあらず。陰氣なるものにあらず。消極的なるものにあらず。神は嚴格胃すべからざる一面を有すると同時に、笑ひ戯れ、歌ひ、又舞ふ處の他の一面を

有す。陽氣なる一面を有す。積極的なる一面を有す。

今日世の多くの人の信ずる處の神は、人の作りたる神なり。即ち、人が其の良心の嚴格なる一面を、客觀的に押し立て、以て神の象となしたるものなり。之れ不完全の神たるを免かれず。虚偽假作の神たるを免れず。

人には陽氣なることを好む賦性あり。酒を飲み、歌を唄ひ、舞ひ踊り樂む心あり。世の多くの宗教は、此の如きことを爲すを以て罪なりとして禁ずれども、之れ人間の自然の性情にして、壓殺すること能はざるものなり。若し之れ自然の性情ならむには、之を以て神の心の顯現なりとするも、敢て否むべきに非ず。否、これ神の心なりと信せざるべからず。然り、神も亦實にこの陽性の心を有す。神は自然を超越して存在するものにあらざればなり。

(5)

神は都々逸を唄ひ給ふ

人は皆陰陽の二性を有す。如何なる人と雖も、時に沈黙考の態に陥り、時に幽玄の境に遊び、又時に仙人の如き心となることあり。此の如き人と雖も、亦前後を忘れて歌ひ舞ひ笑ひ興することもあり。飲酒亂舞の人が、時に冥想沈思静寂の境にあつて神の聲を聴くも、此の間に矛盾ありと云ふべからず。神を信する人が暴飲放歌すと雖も、以て矛盾なり虚偽なり偽善なりとなすべからず。從來の偏頗なる宗教觀を標準として之を見る時は、上の如きは、正に偽善なり、虚偽なり、矛盾なり。されどこれ人間の自然の性情に對して、たゞ一面の良心を標準として批判を加へたる、偏頗固陋の謬見のみ。

夫れ陰陽は天地の相なり。人間にも亦この陰陽の兩性あり。涙を以て神に祈り、謹嚴を以て天に禱る人間は、又酒を飲み手を拍ちて都々逸を唄ふことをなす。宇宙天地の心も亦これに外ならず。神の心も

亦これに外ならず。心を静めて天地萬有を觀するに、明らかにこの兩性の顯現を見る。冬の如く嚴なるあり、春の如く柔なるあり、冬の山は眠り、秋の山は悲しみ、春の山は笑ひ、夏の山は活く。天地を以て神の心の顯現となせば、神には明らかにこの種々なる性質と變化とあるなり。眞善美は天地に充つ。其の一にのみ偏して、之を神の象となすは非なり。眞にして善、善にして美、之れ天地に顯はるゝ神なり。

惡は元より爲すべからず。罪は元より神の心に背く。然れども唄ひ舞ひ笑ひ興すること、を以て惡とはなすべからず。樂むべき時には思ふ存分悦しむべし。笑ふ時には大に笑ふべし。陰氣に構へて謹嚴を装ひ、くすんで以て苦蟲を咬み潰したるが如き面相をなし、鹿爪らしく構へて笑ふべきにも笑はず、徒らに眞面目と實直とを装ふが如きは決して眞の人生に非ず。眞の信仰家にあらず。眞の宗教家にあらず。

神は都々逸を唄ひ給ふ

ストイク派の人生觀の如きは斷じて非なり。又、エビキュリアン派の人生觀の如きも偏したるものなり。若し言ふべくんば、此の兩者の人生觀を混一したる中庸の點に眞の人生觀を見る。修徳と快樂とは決して氷炭相容れざるが如きものにあらず。

聞く、ムーデーに一人の僕あり。ムーデーによりて導かれて信仰を得、熱心なる基督教信者となる。爾來彼の僕は神に祈り、神と交り、神と共に日を送り、常に悦しき生活を續けたり。或日、ムーデーは彼の僕の部室の前を通るに、彼の僕室中にありて祈りを獻げ居たり。その様を見るに、彼は祈りつゝ、笑ひ、笑ひつゝ、祈り、宛として神に戯るゝが如し。ムーデー即ち扉を排して内に入り、大にその不眞面目を詰責す。然るに彼の僕怪訝に堪へざるが如き面持して、ムーデーに言つて曰く、
「あゝ、御主人は神様を如何思召して居られますか。あなたは私に神

様をお父様と教へて下すつたではありませぬか。私は私のお父様に對して、親しく交つて居るのであります。親しきお父様の前に於て笑ふこともあります。悲しむこともあります。又怒ることもあります。それが悪いでせうか。」と。

此の語を聽いてムーデーに一言なし。僕を教へたる彼は、反つて僕に教へられたるなり。その後ムーデーの信仰に一段の光彩を加へたりといふ。

神の前に祈る時、何ぞ我が本心にあらざるに謹嚴を装ふことをなすか。これこそ虚偽なり。偽善なり。ムーデーの僕に於て其の眞正の祈りを見る。神は都々逸を唄ひ給ふの本義は、實に此處に存す。神と我とは一なり。神の前に徒らに鹿爪らしく装ふが如きは、これ我を偽るものにして偽善なり。虚偽なり。神は眞率を愛し且つ悦び給ふ。

神は都々逸を唄ひ給ふ

喜怒哀樂は神の享け容れ給ふ處なり。豈神の前に笑はれずといふことあるべけんや。豈神の前に怒られずといふことあるべけんや。是非善惡の道は自ら此の間より生じ來る。神は虚偽を嫌ひ給ふ。人はたいそれこの天賦の性を見て神に還るべきのみ。

●猫の屍體

嘗て相州鶴沼の海濱を逍遙ひ渚に猫の屍體の打ち寄せられたるを見る。毛悉く脱落して一見猫か犬か鼯か定かならざりしも仔細にこれを見れば正に猫なり。頭と脚がこれを證せり。

彼猫今屍體となつてこゝに横はる。されど彼も元は生きて居たるなり。屋根傳ひに戀を鳴けることもありしなり。死滅せる今の彼に

何ものかある。その聲は何處にありや。その眼の光りは何處にありや。その皮毛の美は何處にありや。今その肉は腐りその美は失せ醜惡見るに堪へざるものあるにあらずや。然り屍體は總べて醜きものなり。

此猫は死せるなり。されど彼も亦正に大宇宙の間に生を享けて生存したるなり。彼にも生存てふ一大事實が存在せしなり。然れどもたいそれ靈智なきが故に彼の生存には意義あるが如くにして意義なし。彼は靈智なきが故にその實在を觀得せざりき。彼はたい永劫に還れるなり。その一生は無意義なりと雖も、その生存は事實なり。然り而して彼は無意義なる中に意義ある一生を畢れるなり。彼はたいこれを知らざるなり。今も知らざるなり。無知の大眞理はこゝに存す。無知の大安心はこゝに存す。

●何れか奇蹟なる

或るアイルランド人友人に伴はれてナイヤガラ瀑布の見物に赴けり。彼はその壯觀に對して、何の驚ける様子もなく、自然の一大不思議に觸れたる様もなく、たゞ平然として何等の感歎詞も發することなかりき。友人怪しく思ひて、『足下はこの壯觀に觸れて、何等の感慨なきか。』と問ふ。アイルランド人無難作に答へて曰く、『何の感慨かあらむ。水が高處より低きに落下す、これ當然のことのみ。若し水が低處より高處に上るか、又は高處より落下せずとせば、これ天下の一大奇蹟なり。一大不思議なり。』と。

あゝ、それ、何れか奇蹟なる。生存てふ一大奇蹟に對して驚異せざるものは、これナイヤガラ瀑布を觀たるアイルランド人と相類するもの

●無一物これ無盡藏

にあらざるか。天下の最も大なる奇蹟は、萬人の以て最も平常套の事となして顧みざる處に存するなり。

水の高處より低處に落下するを以て、當然合理のことなりと思惟するその思想は、抑もこれ何處より來れるか。これ習慣の結果なり。これ後天的に得たる知識の賜物なり。而して人はこの習慣と知識に囚はれて、その靈智麻痺して、この一大奇蹟に驚異することなし。これ幸か。はた又不幸か。吾人は姑らくこれを斷せずと雖も、凡そ世の人の不安動搖は、皆この奇蹟に觸れざるに因するものなることを斷ず。

西行法師、その道友西往上人の死を悼みて、その心の一端を叙して曰

何れか奇蹟なる、無一物これ無盡藏

「西往上人煩ひの事待ると聞えしかば、今は限の對面もあらまほしく覺えて、高野の奥より都に上りて聖の庵に尋ね行きて見侍れば、殊の外に衰へてはかしく物も言ひやらで、我を打ち見て嬉しきとて涙ぐみし事の哀に覺え侍りて、すいろに涙を落し侍りき。閑居の徒然をば我こそ慰め申すべけれ。其許一人残り給ひて如何に覺し歎かんとて袂を絞り侍れば、たゞ哀さ身に餘りて其の夜は留りて萬暇なく後のわざなると聞えしかば、さりとともやがて事は切れじとこそ思ひ侍りしに其曉西に向ひて念佛して終をとり侍りき。

今の別ればげに悲しく侍れども、一佛淨土の再會を、さりとともと心をやりはんべりて涙を抑へて最後の山送りして、泣く／＼烟となし骨を拾ひとりて高野を志し侍りき。其營み侍りし折節、花山院の中將必ら

す參るべき由仰せられ侍りしかば、西往上人の事も申さまほしくて、参りてかくて申すに、涙にくれ給ひて此春東山の花見に伴ひ給へりし事の最後の對面にありけるぞやとて、

馴れ／＼て見しは名殘の春ぞとも

など白河の花の下蔭

と打ちずさみ給へるに、殊に哀れに覺え侍りき。歸る道すがら露けて、墨染の藤衣色かはるまで侍りき。仙洞忠勤の其のかみより、鵜王歸依の今まで深く契を結んで、何の所へも誘ひつれ侍りしに、おくれしかば實に生きてあるべくも覺え侍らず。草木を見るにつけても、かきくらさるゝまゝに歸る、この月の光も朦朧に見えて、いと心も晴れやらぬに、風しのぐ葉草にゆるゝ通り、草の露もろくて物悲しき折節、初雁金の雲井に、ほのかに鳴き渡るを聞くに行合ひにあらざれど、腸を断ち、

千鳥にあらざれども、心を傷ましめ侍りき。かくて高野へ歸りて夢に見るやう、ありし上人來りて、我は都卒の外院に生れぬとて夢さめぬ。かく聞きし後は、都卒の内院にあらざることの恨めしさよと思ふ方も侍れど、外院も亦貴くぞ侍る。若し昔の如く在俗にて朝に宮仕へせしかば、何に外院の往 upper を遂げましや。今生は實に便を缺き、裝束を正しくして帝の御眈にかゝり、禁中に出入してゆゝしく侍るに、年傾きて警を切り、麻の衣に褻るゝは鳥澁がましきに似たりと雖も、實の心とは是にや侍るらん。此の世は果なく仇なる界なり。それにしばしの程を経んとて、名利にほだされて永劫の間三途の衢に沈み侍らんには、返す返す口惜しき事にはあらずや。頼みをかけし主君も助け給はず、憐みはごくみし妻子眷屬も中有の旅には伴ひやは侍る。たい獨り悲み獨り迷へるは、是世にあふ人の後の世に侍り。況んや妻子をふり捨て、

面白き所々を拜み、山々寺々をも修行し侍るは、中々に頼母しくぞ侍るべき。元より世になければ望みもなし。望なければ恨もなし。恐ろしき主君も侍らねば御勘氣も蒙らず。いとほしき妻子も持たざれば貧苦も起り侍らず。財寶を身にそへねば、野山に臥しても、盗人の恐侍らず。又、かゝる世捨人に何の敵かはんべらん。後生の昇沈は又申すに及ばず。」と。

西行がその道友を慕ふ様の如何にゆかしからずや。泣き悲しみて心もあらざるに、いつか靜心の我に還りて、僅かに人生を觀じて自ら慰むる處、流石に西行の面目を見ずや。彼は孤獨を言へり。孤獨てふ文字を用ひざれど、明らかに人生の孤獨を言へり。然り人はこの孤獨を味はざるべからず。神は、すべてを棄て、我に従へと叫び給ふ。妻も棄てよ、子も棄てよ、名譽も棄てよ、地位も權勢も榮達も、財寶も野心も希

望も皆これを棄つる時、我は寂寞孤獨の一人とならむ。西行が、「妻子をふり捨て、面白き所々を拜み、山々寺々をも修行し侍るは、中々に頼母しくぞ侍るべき。」といへるは、この孤獨の歡樂を説けるなり。されど、こゝに寂寞あり淋し味あり。此の寂寞の中に我は我を見出す。この淋し味の中に我は我を知る。神はそこに示現し給ふ。道はそこに展開し來る。

世の人は、『すべてを棄てよ』といふ言に迷ふ。親を棄て、妻を棄て、子を棄て、名譽を棄て、財産を棄て、世に背き人に反き、我のみ孤獨獨歩の生涯に入るを以て、不倫なりとし、不徳なりとし、不義なりとし、不禮無道なりと思惟す。これ執著なり。迷ひなり。煩惱なり。人はそれを離脱せざるべからず。『すべてを棄てよ』とは、この執著を離脱せよとの義なり。この煩惱を除去せよとの義なり。すべてを棄て、天下一人

の我に還る時、人はそこに孤獨の悲哀を感ずべし。この悲哀の心貴し。希望なく主君なく妻子なく財寶なく敵なき人は安し。この安心ありてはじめて道に入るべし。道に入りてはじめて大安心を得べし。此人にしてはじめて家庭を解せむ。致富を解せむ。榮達を解せむ。世を解せむ。人生を解せむ。この大安心を得たる人にして、はじめてすべてのもの皆有意義なるを得む。

すべてを棄てよ。すべてを棄てよ。すべてを棄てよ。無一物なる我となる時、こゝにあらゆる寶は我に充ち來る。西行の安心はこゝにあり西行の寶はこゝにあり。西行の歡樂はこゝにあり。西行の偉大はこゝにあり。我は此上更に説明を用ひず。たゞ一例を引用して無一物の偉大、無一物の歡樂、無一物の無盡藏を言はむ。

題白扇

無一物これ無盡藏

素執不描意高哉。 若著丹青落二來。
無一物處無盡藏。 有花有月有樓臺。

この詩を味ふものは、『すべてを棄てよ』の義を解せむ。孤獨とは無一物のことなり。無知のことなり。而してこれ無盡藏の義なり。西行が天が下を以て我が住居となし、大千世界を以て、彼の生を營む處とせるは、これ無一物の賜物なり。妻も棄て子も捨て、銀の猫も捨てたる彼にして、その道友の死を悲しむの涙は永劫に盡きず。名譽も棄て權勢も棄て地位も棄て世を遁れたる彼にして、なほ妻子を忘るゝ能はずして、彼等を見むが爲に迷ひ來る。あゝこれ人情の極致にあらずや。或人はこれを以てなほ俗心ありとなす。何ぞそれ誤れるや。此涙、此愛著、此人情なくして、人生それ何の意義がある。無一物の處より溢れ來る涙の盡くるなき貴さを知らずして、誰か人生の喜怒哀樂を解せん

や。無一物に還つて初めてこれを知る。人はこの無盡藏を得ざるべからず。すべてを棄て去つて、素執の純白に歸らざるべからず。

●『水夫の死』

某校の卒業生に對して一場の告別演説を試む。その要領左の如し。我、昨夜夢を見たり。我は海岸の丘上に立てり。見渡せば海水渺茫として際涯なく、たゞ紺碧一望、僅かに遙か彼方に一小島の浮べるを見る。忽ち脚下に當りて騒然たる人聲を聴く。駭きて見下せば筋骨逞しき青年の一隊なり。その眼は希望に輝き、その堅く結ばれたる口は固き決意を示せり。彼等一物を身に纏はず、赤裸々の儘身を挺して海に投じ、彼方の一小島目がけて遊び始めぬ。最初は彼此互角の間に

水夫の死

ありて何れとも優劣を判じ難し。然るに、或者は五町にして早くも疲れて水底に姿を没せり。或者は七町にして沈み去れり。或者は十町或者は十五町、かくして殆んど總ての青年皆水中に消え去りて再び浮ばず、空しく水底の藻屑と消え去りて、彼方の小島に達せるものは僅かに數人のみ。然も或者は疲れて到達と共に命を失ひ、小島の上に大氣を吐けるものは一二のみ。我これを見て悚然として、駭き肌に乗ると覺えて目醒めぬ。

諸君、こは一夕の夢のみ。されどこれなにを暗示するや。今日の多くの青年が、學校を卒つて社會に出で行く有様を描寫したる一場の活畫にあらざるか。而して又、その未來を暗示する好教訓にあらざるか。その學校に在る間は、孰れも皆有望にして將來大に爲すあるの青年なるが如く見ゆ。彼等は元氣もあり、思想もあり、希望もあり、理想もあり、

腕もあり、而して學校を出で、社會に投せんとするその門途は實に勇ましく頼母しきものなり。彼等は實社會の荒海の中に身を投じて、暫くは理想ちや、主義ちやなと節を枉げず、理義を矜り居ると雖も、僅か數年ならざるに早くも疲れて知らずの間に世の俗習に感染し、遂に沈みくたれて溺れ死ぬるもの、比々皆然り。彼等の多數は『水夫の死』に了るなり。溺死し去るなり。即ち俗化して主義も理想も何ものもなきツマラヌ人物となり了るなり。而して百人の中に一人、或は千人の中に一人、極めて少數の者が毅然として社會の怒濤と健闘して水平線上に頭を擡げ、恐れず、ひるまず、墮せず、迷はず、遂に理想目的の彼岸に到達して名を後世に留むるに到る。これ彼の夢の實相にあらずや。

諸君、今日の青年は昔の青年と大に異なる點あるを見る。昔の青年は、その學問知識の點に於て、或は今日の青年に及ばざるものあらむ。否、

(24)

確かに及ばざるなり。されど其精神の高潔にして、其抱負の偉大なりし點は、今日の青年の遠く及ぶ所にあらず。昔の青年は人格を作ることに苦心せり。彼等は天下に師事すべき大人物を求むるに苦心して、衣食の如きは更に顧みることなく、第一に男子の面目を重んじ、國家の爲め何事をか爲さずんば止まざるの精神を抱持せり。然るに今日の青年は如何。彼等の頭を支配する思想はパンの問題なり、如何にして食ふべきか、彼等の問題なり。故に金儲けの事あれば、競うて之に赴き、營利の話をなせば、耳を聳て、之を聴かんとし、物質的成功の途を求むることに對しては、狂せるが如く熱心なり。之に反して精神上の事、心靈上の事に對しては、冷々淡々、更に之を聴かんとすることなし。彼等に崇高なる理想を示すは、宛も猫に小判冢に眞珠を與ふると同一なり。彼等は毫も之を顧みず、寧ろ之を冷笑し去らんとす。『然く立派な

ことのみ言ひ居らば飯の食ひ上げなり、競争の社會に立ちては、理想も主義もあるべからず、道徳や宗教のことなどに心を用ひなば、遂に社會の敗北者とならざるべからず。』といふが如き思想が、隱然今日の青年の心を支配しつゝあり。斯くして今日の青年の頭は、驚くべき程物質的に化せり。かゝる青年が社會に出で、直ちに俗化し去るは當然の事なり、忽ち溺死するは照々たることなり。

●漁夫の生活

(25)

小舟を駟つて大海に乗り出し、魚を漁つて港に歸り、これを賣捌き、その金を以て米を買ひ、以て命を繋ぐ。これ漁夫の生活なり。彼の小さき板子一枚が、よくこの人間を乗せて、大海を横行せしめ、勞

働せしめ、生活せしめつゝあるなり。南洋の土人中には、極めて小さき獨木舟を以て、大海を縦横に航行し居るものありといふ。その獨木舟一度波浪の爲に轉覆せしめらるゝも、彼等はその獨木舟に縋り附きて、波が静かになる迄海中に漂ひ、波治まるに及んで再びこれを繰返すと云ふ。『この獨木舟より離脱せざれば、我等の生命は安全なり。』とは彼等土人の常に言ふ處なりといふ。

人生を海に例へんか。吾人はこの海を航するに、極めて小なる一獨木舟を得れば、極めて安全に進み行くを得るなり。よし途中に於て顛覆するも、この獨木舟にしがみ附き居れば、必らず波平らかなる時に會して、再びこれを驅るに足るなり。こゝに安心あり。歡喜あり。希望あり。然らば、吾人が人生の海を航するに要する獨木舟とは何か。才か智か技か藝かはた金か。皆あらず。吾人の乗るべき舟は、斯の如き

ものにあらずして、更に單純に、更に軽く、更に操縦し易きものなり。而して又、更に更に安全なるものなり。此の舟は、此の五體が粉碎せらるるも、決して沈没も破損もせざるものなり。吾人この舟を名けて『道』といふ。吾人はこの『道』を得ざるべからず。

●霞

霞……………

霞の景色は奥ゆかし。面白し。味深し。ハッキリ晴れ渡りたる景色は、美は美なりと雖も、その奥深くして興趣乏し。霞の美はその奥底の見えすかぬ點にあり。

宗教の妙味も霞める點にあり。神祕とはこの霞なり。霞のとれたる宗教は、旗幟明瞭、理路井然たりと雖も、最も價値なき力なき浮薄のものなり。

人も霞める人に重味あり。餘り要領を得たる人は淺薄なり。偉人は皆霞を以て被はる。老子も然り。莊子も然り。陽明も然り。

或人西郷隆盛につきてその感想を語つて曰く、『西郷は偉人か凡人か要領を得ず。その腹の底が知れず。ポーツとして風呂場の中に人を見るが如し。』と。こゝに西郷の偉大なる點が存するなり。

科學はこの霞を許さず。晴朗明瞭なることを欲す。晴朗明瞭ならざれば以て肯定せず。これ果して眞理究明の根本義なるか。吾人甚だ之を疑ふ。

●珠數の修養

珠數を購ひて常に之を懐にし、自ら短所を戒める道具とするは可なり。慾心の生ずる時、贅澤なることを思ふ時、腹が立つ時、人を憎む心の生ずる時、あらゆる邪念邪慾の起り來る時、先づ手を懐にして靜かに珠數の珠を數へ、一回にして心定まらずんば、之を再びし、之を再びして心靜まらずんば、之を三たびせよ。斯して靜心熟慮、邪を抑へ正を探る。以て修養の一助とならむか。人は是を以て消極的なりとなし、機械的なりとせむも、實際に於て益あらむには、之をなさざるに勝ること言ふ迄もなし。

我嘗て珠數を懐にして碁を圍む。一子を下す前に珠を數ふること一回、斯くして常に心を新たにして碁面に對するや、數席皆勝つ。常に

は及ばざる者にも、此日に於ては常に勝てり。こゝに静心の妙を解し、
珠数を以て静心の一具となすことの可なるを思へり。

昔者、腹立つ時は、先づ十を數へよ、十にして心静まらずんば二十、二十にして及ばずんば百を數へよと云へる者あり。珠数の修養は之と相類す。

●マテリヤルは都て空のみ

マテリヤルは都て空のみ、スピリチュアルこれ眞の有なり。力なり。詩に曰く、

焉知萬里連雲勢、不及堯塔三尺高。

と。萬里の長城何の誇りかある。物質的のものは以て國を守るに足

らず。堯が徳を以て守りとするに如かざるなり。

●朝の務

我れは、毎朝褥を離れて洗面を終り、食事を済まして書齋に入り、その日の仕事に就く前に、先づ必らず三十分間の静かなる時間を過す、此間無爲の行、無言の行を試み、自己を省み、自己と語り、自己と親しみ、且つ天と交るを以て、我が一日の生命となす。之を怠る時は、終日不快の念に堪ふる能はず。

我が心を掃き浄めて、微塵の細も之を留むることなく、常に我が主人公を宿すに相應しき、清浄美麗なるものとするは、我が朝々の務なり。而して、我は毎朝主人公の機嫌を奉伺し、其前に脆きて拜す。之れ我が

マテリヤルは都て空のみ、朝の務

日々の修養なり。

(32)

●三つの資本

我嘗て某校の卒業生に語つて曰く、

「今の世は資本の世なり。資本ある者事業を起し、資本多き者即ち成功す。而して今日吾人の有せざるべからざる資本は、第一に健康なり、第二に實力なり、第三にシンセリチーなり。特にシンセリチーを以て重しとなす。直往邁進のシンセリチーなかるべからず。此の三つの資本を有する者は、必らず成功せむ。然らざる者は必らず敗北者たむ。」と。

●墓に行け

散歩を思ひ立ちて、その行くべき處なきに困しむことあらば、即ち墓地に行け。而して此處に瞑想を試みよ。

凡ての人は死するなり。皆この墓に還るなり。有と見し者は遂に無なり。されど墳墓は永遠に吾人の體軀を宿して滅せず。こゝに於てか、無と見しものは有なり。

人生れて遂に行くべき處は墓なり。歸るべき處は墓なり。吾人が生前欲したりし數頃の土地も、吾人の終結に於て眞に必要とする處は、要するに五尺の體軀を納むるに足る五尺の土地のみ。こゝに人生の眞面目を見ること能はざるか。

墓に行け、墓に行け、勞働に疲れたる者も、煩悶に疲れたる者も、生に疲

三つの資本、墓に行け

(33)

れたる者も、皆行きて墓畔にその疲勞を醫せよ。墓地は人間の疲勞を淨むる處なり。こゝに光明は輝けり。平和は宿れり。永遠の生命あり。

●孤獨なれば誠實なり

今日晝辨當を食する時、割箸の間に挟まれたる辻占を、何氣なしに開き見れば、

寫真取るなら硝子にしやんせ

裏からお前の腹を見る

といふ都々逸なり。こはよく人情の一面を穿てるもの、嘗に男女のこのみに限らず、藝娼妓風情の心事のみにあらず、社會の一面を語るものならずんばあらず。

今日の社會は虚偽の社會なり。人誰も信實を以て交る者なく、その心のまゝを現して交る者絶えてなし。心を開放して相交る者皆無なり。我と人との間には、二重三重の壁を設けて、容易にその腹を示さざらんとす。其言ふ處悉く嘘、其行ふ所も又悉く嘘、泣くも嘘、笑ふも嘘、斯くして虚偽の人、虚偽を以て虚偽の人と交る。豈それ虚偽ならざる能はざらむや。其顔を見せて腹を見せざるが、實に今日の世の中なり。「思ふに、何人も孤獨なれば誠實なるものなり。偽善は第二人者の來ると共に始まる。」と云へるエマソンの言は當れる哉。

●徳化の人

言語に依らず、行為に依らず、文章に依らず、事業に依らず、唯人格によ

孤獨なれば誠實なり、徳化の人

りて人を善化し世を感化する如き人とならざるべからず。

其言語其議論其事業其官職其財産等を剝ぎ取れば後に残る處全く「ゼロ」なる人あり。人格皆無の人即ちこれなり。「我唯世に在る」のみにて、隠然社會に勢力を有する人尊し。エマソン曰く、「偉人の力の大部分は潜在なり。是即ち吾人の云ふ所の人格なり。是即ち貯藏されたる力にして、何等の方法に依る事なく、直接にこれを有する人の存在に依りて働きを爲すなり。」と。然り、この「存在」によりて働きを爲す人が人格ある人なり。この人尊し。

●遅讀の人

世には多讀の人あり。又、精讀の人あり。一冊の小説を僅かなる時

間に讀み得る人あり。一日平均一冊の書物を讀む人あり。然るに又、多くの時間を費して精しく讀む人あり。一字一句も之を輕んずることなく、丁寧に讀む人あり。暗誦する程に讀みて、何と云ふ字は何べ一の何處にあるかを知つて、之を於ける人あり。

我は多讀の人か。否らず。我は精讀の人か。否らず。我は考へながら讀む。書物を讀むよりも自己を讀む。書物は我に多くのヒントを與へ、自ら之を考へざるを得ざらしむ。讀み行く間に、我をして思想を誘起せしめて、多く讀むこと能はざらしむ。故に多讀は我の絶對に能はざる所なり。早く讀み得る書物の如きは、淺薄なる書物にして書物の名を値せざるものなり。我は斯かる書を讀むことなし。

眞に價値ある書物は、我を囚へて考へざれば措かざらしむ。一字讀みては考へ、一行讀みては又考へ、一頁讀みては本を閉ちて瞑想に耽ら

しむ。故に我は多讀の人たる能はず、又人の所謂精讀の人たる能はず、自ら稱して以て遅讀の人となす。

要するに、我は主にして書物は客なり。我はテキストにして、書物はコンメンタリーに過ぎず。こゝに眞の讀書法を案出せざるべからず。

閃の人

我には組織的頭腦なるものなし。幸か不幸か斯る頭腦は、我れ之を有せざるなり。我思想は總べて断片的なり。之を敷衍し、之を組織的にして纏まりたるものとするの才なし。又斯くせんと欲する心もなし。唯断片的思想、所謂フラッシュ、オブ、ソートを受す。直覺的思想を貴ぶ。散文も詩歌も、之れ我がラインにあらず。天籟に觸れて自ら之

に點頭くを以て足れりとなす。感ずることを以て我が天才となす。之を明らかに、巧みに、面白く、或は文章に、或は演説に表現するは、我の最も拙なる所とす。敢て之を勉めんとするや、忽ち生命なき死灰と化し去る。

人は我を呼んで雄辯家となす者あり。然れども、我は自ら以て雄辯家たるを信ずる能はず。我若し演説に於て成功せしことあらば、そは思想に於て成功したるに非ず、ジエスチュアに於て成功したるに非ず、唯燃えたるインスピレーションに依りて成功したるのみ。我演説は、この靈の火燃えざる時は、常に失敗に了る。整然たる思想を有し、完全なる草稿を有すと雖も、このインスピレーション燃えざれば、演説に成功することなし。

我はたゞよく理解し、よく聴き、よく受け、よく感じ、よく崇め、よく驚く

のみ。これ我が使命にして、又我が幸福なり。あゝ、我はたゞ閃の
人なるのみ。閃なり。閃なり。——閃は天の聲なり。閃は默示なり。天啓
なり。常に之を聴き、常に之を受く。我はこの光榮と恩恵とを感謝せ
ずんばあらず。

●教師

我の天職は果して何ものぞ。——あゝ、教師なり。教師なり。学校の
教師にあらず。英語の教師にあらず。人を教ふ、これ我が天職なり。
天に聴きしものを人に教ふ。われ之が爲に生る。
基督も教師なりき。釋迦も教師なりき。孔子も然りき。エマソン
もトルストイもカーライルも皆教師なりき。

我、教師の名を愛す。文人も、詩人も、學者も、政治家も、畫家も、音楽家も、
將又藝人も、其道に達したるものは、皆これ教師なり。人間の教師なり。
今の世に於ては、教師の名は甚だしく濫用され、又甚だしく下落せり。
教師ならざる者、猥りに教師の名を犯すが故なり。
教師の名は、獨り最高の人間にのみ附すべきものと知れ。

●富士に定姿なし

富士に定まれる姿なし。これを描く人、各々その姿を定む。人に定
まれる心なし。これを云ふ人、各々これを斷言す。

教師、富士に定姿なし

●一人一神萬神一如

物心附きてより死するその一瞬の前まで、罪と悪との生涯を過し來れる者が、今將に死せんとする時に當り、翻然として本來の自己の眞面目を感得し、その罪を悔い改め、祈禱して瞑目せり。此者遂に天國に入れりといふ物語あり。

又、その一生を善と徳とを以て送り、死ぬる一瞬の前に於て罪を犯せる者、悔改の追なくして死せり。此者遂に地獄に墮せりといふ物語あり。

前者は基督教國の物語にして、後者は佛教國の物語なり。その宗教の如何を問はず、此の二つの物語は、宗教家の以て一考を要する重大なる問題なり。

地獄極樂を説くは、末の問題なり。此の威嚇と勧誘とを以て、自己の宗門に人を繋ぐは、是の愚なり。

宗教は傳ふべからず、強ふべからず。たゞそれ説くべきのみ。信仰は各人の自由なり。宗派は感情上の差別のみ、好悪のみ。

人、各々宗教を有す。人、各々神を有す。人、各々信仰なかるべからず。而してこれその人一人の宗教なり。神なり。信仰なり。基督教にあらす、佛教にあらす。

神を信するものは基督教なりといふも可、佛を信するものは佛教徒なりといふも可、されど所謂佛教の所謂佛を信じ、所謂基督教の所謂神を信する者は、これ眞の信仰の人と云ふべからず。これ迷信の人のみ。一人には一の宗教あるのみ。萬人各々相異なる宗教を有す。萬人通有の宗教は存せざるなり。萬人共拜の神は存せざるなり。人十人

あれば十の神あり。人百人あれば百の神あり。又人五人あれば五の宗教あり。人十人あれば十の宗教あり。人はたゞそれ自己の神を見ざるべからず。自己の宗教を信せざるべからず。自己の信仰、自己の宗教、自己の神なくして、人は絶對の安心立命を得べからず。

一人にして一神あり。萬人にして萬神あり。されど、萬神一なり。たゞ天に歸す。これ宗教の歸著。

●信仰の冥合

我が思想！ 我が感情！ その眞なるもの、その善なるもの、その美なるもの、その我を動かし人に迫る如きものは皆基督の心より迷り來れるかの感あり。その源泉は基督の中にあるが如く感ず。我はなほ

もクリスチャンなるか。遂に基督教より足を洗ふこと能はざるか。然れども我は基督教信者なることを標榜すること能はざるなり。『基督教信者』なる名稱に包まるゝ信仰や思想には、我が以て是認する能はざるもの多し。我れ自ら呼んで基督教信者と云へば、之れ世を偽り自己を欺くものなり。これ我が敢て基督教信者たらざる所以なり。

然れども、基督の心と我心とは共鳴するものあり。然り、これ偶々一致するものにして、我れ之を彼に學びたりと思はず、何人と雖も其心の深奥なる處に退いて其眼を開けば、基督の見たと同じものを見るべきなり。其耳を澄まして聴く時は基督の聴きたると同じ聲を聴くなり。之を信仰の冥合といふ。

我は直ちに神の聲を聴く。所謂基督教徒の云ふ如く、基督を通じて之を聴く者にあらず。我が世の基督教信者と經驗を異にするは此點

なり。我は基督を呼んで師と言はず、善き師よと祈らざるなり。「何故に我を善師といふや。一人の外に善なる者なし。即ち神なり。」とは、これ抑も誰が言なるか。

●ブランクページ

何ものも感せず何ものも思はず、うか／＼として、空しく過したる時間、即ち人生のブランクページは苦痛なり。堪へ難き苦痛なり。

●眞友とは

お前も獨りポツチか、我も獨りポツチなり、と互ひに名乗り合ふ時に

のみ、眞友を見出すなり。人生の寂寞を感じ抜きたる時、初めて眞の友が得らるゝなり。底なき穴の底に墜落して其處に得たるものに非ざれば、眞の友と云ふに足らず。然れども、その底に到り見れば、其處に一人の人影だになきことあり。其時の淋しさ、芭蕉の

この道や行く人なしに秋の暮

の味はこゝに於て初めて解せらる。

眞友とは、其者の心の奥に我れ常に居り、我心の奥に彼れ常に宿り、我獨り在るも彼は我心を離れず、相見ざるも常に交り、我れ思ふ時彼と共に思ひ、我れ感ずる時彼と共に感じ、世界は消滅し人類は死果つるも、彼と我とは常に存在すと感ずる者なり。

我今眞友の味を知る。無線電信に勝る幾萬倍の感應感通が相互の心に響くが如く感ず。

ブランクページ、眞友とは

●冬籠は厭なり

人は年を重ぬるに従ひ、保守的となる。小さき狭き園ひの中に閉塞するに至る。あゝ冬籠はしたくなきものなり。思想の冬籠りは断じて爲すべからず。常に悠々たる天地と共に活きよ。飄々として無限の境に遊べ。

●心交の友

市街の火事跡に到り見るに、其處此處に土藏のみ残れるを見る。周圍の家は都て焼失して、獨り倉庫のみ残存す。世に友人は多し。されどその多くは木造の家屋の如く大火起るに

●宇宙と人

及んで忽ち焼け失せて跡かたもなし。よくこの火に耐へて残るものは極めて少數の倉庫の如く、僅かに指を以て數ふべきのみ。面交の友は一時的の交りのみ。獨り心交の友は永遠の交り也。我心交の友あり。永遠の友あり。其數一二に過ぎずと雖も、我はこれを以て矜とし、幸福とし、満足とす。我れ常に彼等の心に居り、彼等また我心に居る。此の交情や分つべからず。離すべからず。破るべからざる。天地不可思議の結合同化によりて成る。我は此の友によりて活く。心交の友を有するものは福なるかな。

宇宙と人との關係は如何。無限なる宇宙と高貴なる人間との調和

冬籠りは厭なり、心交の友、宇宙と人

は如何。この二個の『大實在』を對照して考へ見よ。富や、名や、權勢や、肉慾や、戀愛や、家族や、社會や、國家などの名を以てしては、餘りに淺く餘りに薄き關係ならずや。宇宙と人間との偉大なるに比して、餘りに貧弱なる關係ならずや。人は宇宙に何を求むべきか。宇宙は人に何を要求するか。深きは深きに應ふ。人に無限の心あり。宇宙に無限の心あり。無限と無限と相通じて一體とならんとす。是れ誠に宇宙と人との關係なり。

●なほ幾日ありや

死ぬる迄なほ幾日ありや？

あゝ何ぞこの事を思はざりし。あゝ何ぞ早くこの事に氣附かざり

し。

されど今醒めたるを悦ぶ。

朝に道を聽いて、夕に死すとも可なりとか。天我に一日を賜はれば、我は満足して一日に活きん。一年を與へ給はば、我は感謝して一年の生を送らむ。我が心に響く不思議の聲を聽きつゝ、かくして生きむ。

この聲若し我耳にのみ聞えてこのまゝには他人の耳に聞えざるものならむには——我はたゞ謹んで之を聽かむ。聽きしことは直ちに記して、之を久遠に傳へん。天の命する我の業は、即ちこれなり。

爾のものたる我、我のものたる爾、爾と我と——我住家は實にこゝにあり。爾は我を知る。我は爾の裳裾に觸れぬ。あゝ我れ爾の裳裾に接吻せり。

願くは、爾の御顔に輝く光を示し給へ。これ若し我に過ぎたる願ひ

ならば我は爾の御足に涙の油を注ぐを以て足りなむ。然りこれをも
て足りなむ。(祈禱)

◎大道

汽車中の人を見よ。右するあり、左するあり、横臥せるあり、凭りかゝ
れるあり、歌ふ者あり、語る者あり、本を讀む人あり、物を考ふる人あり、彼
等はみな事を爲しつゝあり、活動しつゝあり。されど汽車は、各人の行
動の如何に拘らず、總てを載せて馳走し、其の到るべき處に行く。然も
彼等は自ら以て汽車を驅るなりと信じ、その五體の常に汽車の爲に動
かされつゝあるを思はざるなり。汽車は人間各自の意志目的を超越
して、人間各自を運搬しつゝあるを思はざるなり。

人生の大道は此の如し。宇宙萬有の大道は此の如し。自然の大道
は此の如し。大なる靈法はこゝに存し、大自然の推移の潮流はこゝに
存す。吾人の淺才小智何の爲す處かある。此の大なる宇宙萬有の大
道は、吾人の意志目的理想の總てを超越して、吾人を支配しつゝあるな
り。此の大道に順ふ者は榮え、逆ふ者は亡ぶ。敢て之に逆らひ、之と闘
はんとする時は、反つて我手は以て我頭を打ち、我刃は以て我咽喉を刺
すのみ。人は我上にも我中にも、我を超越して我を支配する者あるを
知らざるべからず。これ靈なり、神なり、道なり。

高濱虚子氏の『朝鮮』の中に、彼が高橋剛三といふ朝鮮浪人と物語
れる記事あり。其の中に高橋氏の言に、

『國家とか文明とかいふ巨人は、澤山の個人を犠牲にして、其進むべき
道に進みつゝあるのであつて、個人が自己の名譽とか職責とか疍癩と

か敵愾心とかいふものに支配されて一生懸命になつて居るが、月日
経つて見れば、何の事はない、或運命の糸に繰られて、めい／＼割當てら
れた役を遣つて居るに過ぎぬ。』

と蓋し至言なり。吾人は自ら以て偉大なるが如くに感じ、偉大なる事
を爲しつゝあるが如くに感じ、萬物を支配しつゝあるが如くに感じ、大
道我れ獨りこれを進むが如くに感じつゝありと雖も、畢竟するにこれ
汽車中の活動のみ、行動のみ。自然の大道は滔々として總てを載せて
走りつゝあるなり。エマソンも亦此事を言ひて曰く、

“Our action is overmastered and characterized above our will by the law of na-
ture. We aim at a petty end quite aside from the public good, but our action
arranges itself by irresistible magnetism in a line with the poles of the world.”

● 日 誌

日誌は自己のコッピ―なり。第二の自己なり。日々忠實に之を認
め置かむには、何時何處に於て死するも我は此の日誌によりて生く。
其日々の我を此の日誌に遺し置くは、我影を留め、我足跡を遺し、我記
念碑を設くるなり。日誌なき日は空なり、プランクなり。

● 自己と親むべし

自己と親むべし。靜かに自己と相見え、相語り、相親むことなくんば、
遂に自己を失ふに至らむ。世には生後一度びも自己を見しことなき
ものあり。自己を顧みることせざる人あり。自己と親むことなき

日誌、自己と親むべし

人あり。孟子は之を放心の人と云へり。世には實に放心の人多し。これを凡人とも云ひ俗人とも云ふ。彼等は常にその自己なる者を忘れ去つて、此の心を空虚にし、その主なる我は留守となりつゝあるなり。かゝる人は終生齷齪として外界の支配に従つて心を勞し、身體を勞し、不安不満の内に終る。頼る處なきなり。自ら恃む處なきなり。自己に親む人は神に近くことを得。即ち孔子の性を知る者は天を知るなり。性を見る者は天を獲るなり。此の如くにして身始めて安し。

●眞理の標準

眞理の標準は何處にありや。何を以て善となし、何を以て眞となす

か。嘗ては聖書に無限の權威ありき。聖書を以て神の言葉となし、凡百の事皆聖書によりて最後の判決を求めたり。然れども今や聖書はその權威を失ひ、以て最後の聖斷者となること能はず、眞理の標準とならざるに至れり。

我が眞理の標準は一に我性にあり。二に自然界にあり。我性に存する處のもの、自然界に照應するを以て眞理となす。芭蕉の所謂造化に従ひて造化に歸るの謂なり。

神の心は此の如くにして知ることを得。我性に宿る神と自然界に現るゝ神と相一致する處、これを以て眞理と信するの外、我に於て更に眞理の標準となるものなし。

●愛神

(58)

天を信ず、神を信ず、佛を信ず、といふだけの信仰は、未だ以て眞の力ある宗教的靈感を生じ得るものにあらず。神の愛を信するに到らざれば駄目なり。神の愛を認めずんば、我がハートの要求を満足すること能はず。我れ神を愛し、神我れを愛し給ふてふ信仰生じて、初めて感謝隨喜の涙に咽び、厥起して人の爲に盡すの熱心生ず。此の熱心なき信仰は、信仰の名ありて信仰にあらざるなり。神を信すと云ふ人多しと雖も、神を愛すと云ふ者は極めて鮮し。これ熱心なる宗教家の乏しき所以なり。苟くも宗教を標榜し、天を信すと云ふ者、宜しく活ける信仰を求むべし。熱心我を喰ふの信仰を祈るべし。

●戀愛

戀愛は奇蹟なる哉。この前に義理もなく、法律もなく、道德もなく、宗教もなく、唯、自然の急流滔々として流るゝあるのみ。自然の愛は神の愛なり。罪にあらず。斷じて罪にあらず。貴きものこの中に存す。戀愛はバイエテイなり。宗教なり、何人も干渉すべからず。

●返信

(59)

人より手紙を得て、之に返事を怠るは背徳なりと知るべし。返信を出さざるは、人より話しかけられて返辭をせざるに同じ。これ何たる無禮ぞ。故國木田獨歩が植村正久氏を評する文に、『小生は先生に書

愛神、戀愛、返信

狀を出す勇氣なし。何故となれば碌々読みもせず。返書をや。此點甚だ惜しき人物なり。小生は先生に多少の知己の感あれども、此點あるが故に、遂に友たる能はず、人生の恨事此事に候。」と。予此の文を讀んで、大に自ら戒めらるゝ處あり。

長者の手紙に對しては、必らず返書を怠らぬ者も、目下の者には返書を出さぬ人あり。之れ一種の利己主義なり。長者への返書は怠るとも、寧ろ後進の者、自分より年若く位置卑き者、目下のもの、殊に學生などには、必らず返書を送ることを怠るべからず。

予は自ら音信の義務を果すに忠なる者なるを信ず。その餘りに手紙を書くが故に、妻は時々『手紙屋』などと呼んでからかふ。然もなほ時々返書を怠ることあるを恨事となす。返書を怠りたるが爲に、良友を失ひたる苦き經驗を有す。これ返書を認むること即時ならざる

が故なり。

書信を手にしたる時は、直ちに返書を認むるに如かず。時を過せば機を失ひ、感興を減じ、墮氣を誘致し、返答が返答として不調和なるものとなることあり。又、これが爲に、遂に返書を忘れて了ふことすらあり。返信は必らず即時に出すべし。これ予の日常訓の一なり。

●鐘

上野の鐘を聴く

力の強い人が撞けば――

大きく鳴る

力の弱い人が撞けば――

聲

小さく響く

警鐘を聴く

いつも同じ音である

いつも同じ響である――

●戀なき人

●戀なき人は憐れむべし。

彼の功成り名遂げ富を得るまで女を顧みず、戀を顧みず、一意専心成
功をのみ心掛け、名遂げ富成り老いての後、はじめて女を探し、戀を求む
るが如き、感心と云へば感心なれども、これ共に生を悦しむべきの人に
あらず。

戀は貧富貴賤を超越し、成功不成功を超越し、名譽榮達を超越し、生活
そのものをすらも超越す。夫婦といふ関係は別問題なり。人は戀な
かるべからず。戀なき人は憐れむべし。戀し得ざる人は憐れむべし。
名利富貴の爲に戀を犠牲にするが如き人は、最も卑しむべく嗤ふべく
排斥すべし。

●眞劍に笑へ

赤兒の笑ふや、眼も鼻も口もすべて顔の造作を崩して笑ふ。これ眞
劍の笑ひなり。女はよく笑ふ。されど、その笑ふや、いやに氣取りて相
好を崩さざらんとし口の格好まで變にするが癢なり。これ虚偽の笑
ひなればなり。

戀なき人、眞劍に笑へ

● 靈は叫ぶ

靈は叫び肉は願ふ。これ人の迷ふ所以なり。

● 肉あるが故に

肉あるが故に人に迷ひあり。

● 子福長者となれ

畑を耕やせる小娘の手足を見るに、皮膚は荒れ、指趾太く、如何にもゴツ／＼して無骨なり。顔は日に焼けて赭く、髪は蓬々として艶を見ず。

されど彼女には明らかに美あり。色氣これなり。彼女の胸には温かき血通へり。彼女にも美と魅とあるなり。
一村媪われに笑語して曰く、『手足はザラ／＼しても、あれで柔らかな所があるんですよ。』と。面白き語なり。
なまなかに美衣を装ふ都會の女となつて石女としてその一生を過さんより、百姓の小娘となつて子福長者となれ。

● ソクラテスを憶ふ

それ靈源は明らかに

皎潔なるを俗人は

流註迷ひを深くして

靈は叫ぶ、肉あるが故に、子福長者となれ、ソクラテスを憶ふ

中實あだに捨つるかな

『汝れを知れ』とは誰が云ひし

云ふは易きも知り難き

その『汝れ』こそは永劫の

生命を人に授くなり

あゝソクラテス、ソクラテス

生きて真理の海に活き

死して不滅の靈に活く

流註誰が迷ひぞや――

●抵抗主義

一、ノンコムフォミスト

エマソン曰く、『苟くも眞の人物たらんと欲する者は、ノンコムフォミストたらざるべからず。』と。このノンコムフォミストの一字大に味ふべし。此の語は、昔英國に於て宗教合同案に賛同せざりし一派の僧侶に冠せる國教を奉せざる者と言ふ義の文字なり。彼等は非國教論者として世に立てるなり。彼等は飽迄も天下の輿論に反對して止まざりし俠骨の士たりき。孟子の所謂千萬人と雖も吾れ往かむといふが如き、熱誠猛烈の勇氣に満ち、自尊獨立の精神に富み、自信力の人々たりき。

二、迎合主義

苟くも眞に人物たらんと欲する者は、かゝる氣象を養はざるべからず。然るに今日の人々は餘りに卑屈なり。意氣地なしなり。彼等は能ふ限り世に逆はざらんとし、人の機嫌を損せざらむとす。彼等は世の意見輿論に盲従せんとす。斯すれば人の氣に投すべきか、斯すれば世の讚辭を得べきかなど、此の如き事にのみ朝夕その心を悩ましつゝあり。彼等は萬事に就きて、人の氣を迎ふるを以て成功の秘訣なりと思惟しつゝあるなり。而して斯くするを以て巧みなる處世術と心得つゝあり。彼等は己れの意見を放棄し、甚だしきは己れの良心までも賣却して世の寵兒たらんと腐心す。

三、恐るべき風潮

今日の青年も亦漸く此の風潮に捲き込まれて、氣骨なく氣概なく意氣地なき者となりつゝあり。或者は昔の青年は亂暴粗野、蠻的なりしが、今日の青年は柔和、温順、上品にして文明的なりと云ふ。されどこれ大なる謬見なり。柔和、温順、文明的など云ふが如き美しき言葉を以て彼等を誤魔化し去るべからず。その柔和と見え、温順と見え、上品と見え、文明的と見ゆるは、實にこれ青年の墮落なり。これ青年の青年たる元氣が消耗滅亡せるなり。これ恐るべく悲しむべく警むべき現象と言はざるべからず。

四、無氣力の一例

學校の教場に於て、生徒を教へつゝあるにも、昔の青年と今の青年の差異の甚だしきを感じず。昔の學生は意地穢き程、先生を誣め苦めんと

して、能ふ限り下調をなし勉強をなし来て教室に臨み、教師が少しでも曖昧なる言を吐くや、直ちにこれを無遠慮に遣り込め、教師先生をして降伏謝罪せしめて以て得意としたるに反し、今日の學生は極めて温順にして、教師に反抗論するが如き者は、殆どこれあらざるなり。質問を試むる者さへ稀なり。彼等は従順に教師の講義を聴き、教師の言ふ所に誤りなきものゝ如く信じ、嘘を教へらるゝもこれを真と思ひ、その誤りを見出すも弾劾を試むる勇氣なし。斯して今日の教師は大なる爲樂を感じつゝあり。

五、全世界を得るも何かせむ

今日の教師は樂なり。されど其の代り、折角之を教授するもその張合なく、手應へなく、面白味なし。女子を教へつゝある者が、餘り温順に

して面白くなしと言へるが、此點に於て男子を教ふる者も亦同感なり。之に依りて見るも、今日の青年が如何に無氣力なるかを知るべし。斯る青年が世に出づるや、徹頭徹尾迎合主義を取つて、其の生活を營むに至る。彼等は年と共に其影はうすれ行き、意志は薄弱となり、遂に神聖なる自己を破滅するに至る。此の如くにして世に立身出世すると雖も何の値するものぞ。その富は山をなすとも、その位置爵位は高まるとも、世の喝采賞讃を博するとも、これ何の賞すべき處ぞ。これ何の誇るべき處ぞ。人若し其の生命を失はば、全世界を得るとも何の益あらんや。

六、抵抗主義者たれ

眞の人物たらんと欲せば、エマソンの言へるが如く、ノンコムフォーム

ストたらざるべからず。世に反抗する氣象を養はざるべからず。彼右すれば我は左せんとの根性を養成して、意志の堅確と自己の確立とを企圖せざるべからず。苟くも世を怖れ、人を恐るゝが如きことあるべからず。先輩輿論慣習、かゝるものは一切超越してかゝらざるべからず。唯我に頼りて立ち、我に頼りて進む。獅子遊行するや伴侶を求めず。獨立獨行を以て男子が男子たる面目なりと心得ざるべからず。總てのことを疑ひて以て進む。道徳とか宗教とかいふ美しき名目に囚はれずして、これ果して善か、これ果して悪か、これ果して真か、これ果して美か、みな自らこれを疑ひこれを研究し、若し自ら考へて以て、善なり真なりと思はずば、孔子の言なりとも、釋迦の言なりとも、將た又基督の言葉なりとも、斷じてこれを否定し、これに反對し、これを葬り去るに用捨あるべからざるなり。

七、盛信僧都

往昔盛信僧都といふ曲り者あり。彼は世間てふものを全く眼中に置かず、凡ての事を自由氣儘にやつて除け、たえて人に随ふことをなさざりき。世の人は晝働きて夜眠るを例とするに、彼は晝夜の別なく眠き時に臥し、醒むるや働きて、得手勝手の振舞をなせり。又宴席に招かる事ありて、食膳自分の前に運ばるゝや他の客人に關することなく、自らさつさと喰ひ、喰ひ終れば遠慮なく歸るなど、傍若無人、仕末のつかぬ人なりき。彼の如きは全く極端なる人物なりと雖も、一面に於て敬畏すべき人物なり。彼はノンコムフォミストの標本的人物なり。今日此の如き人ありや。斯る氣象を以て世に立つ人ありや。天下を敵として起つ人にして、初めて天下の大人物たるべし。

八、トルストイ

トルストイは無抵抗主義を主張せりと人は言ふ。然し彼の無抵抗主義は眞の抵抗主義なり。彼は決して無主義の人となれと言へるに非ず。無信仰の人となれと教へたるに非ず。彼は寧ろ己れ一個の信仰を以て起ち、之に反對する者あらば、勝手に反對せしめよと云へるなり。彼は毫も世を顧みることをせず、世を怖れず、天空に聳ゆる大樹が、風吹かば吹けといふ態度を採れり。表面は無抵抗主義と見ゆと雖も、トルストイは、その實、猛烈なる抵抗主義者たり。

九、基督

『惡に敵する勿れ、人汝の右の頬をうたば、亦ほかの頬をも轉らして之に向けよ。爾等を誣へて裏衣を取らんとする者には、外著をも亦とら

せよ。』と教へたる基督は、無抵抗主義者の如く見ゆるも、彼ほど世に抵抗したる人はあらざるなり。彼れ言はずや、『地に泰平を出さんが爲に我れ來れりと思ふ勿れ、泰平を出さんとにあらず、刃を出さん爲に來れり。夫れわが來るは、人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其姑に背かせんが爲なり。』と。嗚呼基督も亦大々のノンコムファミストたりき。猛烈なる抵抗主義者たりき。人苟くも眞に人物たらんと欲せば、ノンコムファミストたらざるべからず。

●得られざる戀

得られざる戀が樂しきなり。得られぬ處が花なり。こゝに詩あり、

得られざる戀

こゝに歌あり、こゝに美あり。

互に戀して其戀を全うすること能はざる苦痛と煩悶とはこれ戀の
與ふる最大なる幸福にして又快樂なり。ブレッシングなり。戀愛も
一度び其の望みを遂ぐれば平凡となる。無意味となる。底が知れて
厭氣を催す。飽きが来る。コートシップの間が快樂の絶頂なり。ホ
ネームーンとなれば末なり。

生き殺し我身一つに自由なる

身となりし故飽き初めにけり

飽厭とはこれなり。満足の不満足はこれなり。満足の悲哀はこれな
り。

終生結婚せずして戀する人は、最も永く、最も多く、幸福を享くる者に
あらざるか。

● 涕 泣

徐ろに記憶を辿れば、物に觸れて何とはなしに涙流れて衷心より泣
けること屢々なるを思ふ。

明治二十七年の頃なりしと覺ゆ。一日お茶の水橋附近を散歩せる
時、岸邊の堤に茂る樹々の梢に、雀の樂しげに舞ひ遊べるを見て、何とは
なしに暗涙の頬傳ふを覺えき。此時眞に泣けり。

鎌倉に遊び七里ヶ濱の邊りを逍遙へる時、彼方の丘の上に靜かなる
牧場を望み、其處に立てる農夫の平和暢陽なる様を見たる時、心より泣
きぬ。

信州山田温泉に避暑し、徒然の一日を娘を伴ひて萬座温泉に遊ばん
として、夏草しげき山路を辿り、山又山を越え行ける時、木立深き谷底よ

り鶯の啼く聲を聞きて泣きぬ。
 汽車にて箱根を越ゆる時、聳え立つ千尺の巖頭に白百合の咲けるを見て涙を揮ひぬ。

時も場所も季節も環境も、これ等の記憶を外にして今胸に回顧追想するものはこの衷心より泣ける涙なり。わけもなく泣ける記憶なり。此涙の何たるを知らず。たゞその貴き涙なるを思ふ。

故國木田獨歩も亦、予と同じき経験を叙せり。而して曰く、これ『野心虚榮煩悶、驕奢懷疑と、満足平和、信仰無罪、健康質朴謙遜との對照なり。予は之を名けて醇樸の生涯の眞福音と稱す。』と、然り。

一日女兒今年十五歳なるが予の傍にあり。彼女予の此談話を聞きて怪訝の目を睜り、

『おかしいわねえ。お父様はお泣きになつたの。どうしてそんない

いものを見て泣いたんでせう。私なんか雀を見たり百合の花を見たりすると嬉しくつて嬉しくつてたまらないのよ。』

この言眞なり。これ天真爛漫の矜りなり。わが心若しこの無心なる少女の如く淨く美しく、無邪氣ならんには、喜々として遊べる雀にも麗しく咲ける百合にも、随喜雀躍するが自然なり。されど、心に驕慢あり、野心あり、煩悶あり、不平あり、宗教あり、道徳あり、義理あり、情誼ある我は、その雀、その百合、その美、その眞に對する時、彼と我との對照の差異の甚だしきに泣くなり。泣かざるを得ざるなり。獨歩の言へるは即ち此事なり。

● 螻

螻といふ蟲あり。飛ぶ事を得れども家を過ぐる能はず。よく登ると雖も木を窮むる能はず。泳ぐことをよくするも谷を渡ること能はず。又よく穴を掘れども自分の身體を藏す能はず。然り而してよく走ると雖も人に先んずること能はずといふ。見來れば螻は五能ありて然も一として役に立つものなし。

現代の青年を見る。彼等はよく書を読むと雖も學を究むる能はず。よく運動すると雖も鋤鎌を把ること能はず。背負ひ切れぬ程の學科を學び居りながら、然もなほ一能足らず。彼等は横文字も知れり、理窟も言へる、世界の氣勢も談ず、されど彼等の能や螻と相距る遠からず。萬能備はつて一能を缺く。これ現代の青年の役に立たざる所以なり。

● 宣言

語る前に行へと云ふか？ 世界史の上に於ける大革命は、皆堂々たる宣言の下に行はれたり。俗衆には宣言を要するなり。豫言を要するなり。

● 目醒時計

同じ用を爲す目醒し時計にも、ガラ／＼と鳴るベル時計と歌をうたふオルガン時計との二種あり。

眠い朝など、ベルの方がガラ／＼やり出す時は癢に障つてならざるも、オルガンの方が悠々として落ち附き拂ひ、靜かに歌ひ出すは餘り癢

螻、宣言、目醒時計

に障らす。

俗に生きんとする者はこの呼吸を知るを要す。

●乾坤無住同行二人

芭蕉行脚の折、その笠に題して曰く『乾坤無住同行二人』と。その行くを見れば、翁たゞ一人なり。誰か同行の侶伴なる。

芭蕉行脚の折、弟子の之に従ふ者あり。或は一人、或は數人。然も其笠に題して曰く『乾坤無住同行二人』と。誰かこの題辭を解する。人生の真相は孤獨にあり。寂寞にあり。人生は淋しきなり。誰かこの淋しみを感得する。真にこの淋しみを感せむこと、これわが願ひなり。而して翁の『乾坤無住同行二人』の八字に會するに及んで、こ

の人生の真相に逢著したるが如き心地す。味へば味ふ程、この身が惻惻として孤獨寂寞の感に堪へず。この八字の意義を解せずして、誰か人生、天地、神、未來、これ等のものを解するものぞ。此の八字の真相を感得せずして、誰か歡喜、平和、希望、勇氣、これ等のものを得らるゝものぞ。人生は淋しきものなりと、理窟や觀念にて思ふのみにては満足すべからず。真にこの淋しみに接觸して、悄然として自失するばかりに體得せざるべからず。否、自失せざるべからず。

あゝ人は、何故にこの淋しみを感せざるか。淋しみを知りつゝなほ淋しみを味ひ得ざるは憐れむべし。何故に感せざるか。シンセリチの足らざるが故か。何ものにか迷ひ居るが爲か。酔へるが爲か。夢み居るが爲か。醉へる者は醒めよ。夢み居るものは起きよ。シンセリチの足らざるものは真面目に還れ。迷へるものは本然の自我

に戻れ。魔に犯さるゝものはこれを拂ひ除けよ。真面目の足らざるものは祈れ。神経の麻痺せるものは鞭で。かくして、獨歩孤獨の真面目なる自我に歸りて、しみぐゝとこの淋しみを味へ。其處に乾坤無住の我を見出さむ。

親あり、妻あり、子あり、兄弟あり、友あり、親戚あり、富あり、成功あり、名譽あり、爵位あり、斯して世は賑やかに人は忙はしく又樂しと思ひ、失敗、墮落、破滅、頽廢、斯して世は慘酷に又悲惨なるものと思ふが如きは、凡常俗人の見解なり。世は賑やかなるものにあらず、又慘酷なるものにあらず。見よ、其親子兄弟は何時かは死するなり。其名譽榮達も何時かは滅ぶるなり。失敗も墮落も皆過去の夢と消え去るなり。試みに汝の周圍を見よ。汝の知れる人の死を數へ見よ。何物かこれ滅びざる。何人かこれ死せざる。一人死し、二人死し、三人四人五人、斯して汝の周

圍の人々は皆死滅し去るなり。而して人皆死して我一人こゝに儼存せりと思へ。この限りなき宇宙の中にたゞ一人悄然として立てる時、汝は其處に何ものをか感ずるや。淋しみに非ずして何ぞ。寂寞に非ずして何ぞ。——斯く言ふと雖も、是等は皆理窟のみ。言辭のみ。理窟はこれを解すべし。されどリアリチーを感得せずんば何の意義がある。價值がある。たゞそれ寂寞を味へ。たゞそれリアリチーに觸れよ。たゞそれ乾坤無住を悟れ。

乾坤無住、たゞそれ神と我のみ!!

これを真に自覺すれば、我は直に芭蕉ともなり、西行ともなり、陽明ともなり、釋迦ともなり、基督ともなる。新生命はこゝより湧き起り、新希望はこゝより輝き來り、愛も慈悲もこゝより生れ來る。孤獨寂寞の我が生命は、こゝに力となり、光となり、活動となる。

乾坤無住を悟得する時、こゝに汝の道は開く。こゝに平和あり、安心あり、努力あり。汝、何ぞ道を知つてその道に猛進せざる。汝の道はのみ。同行はたゞ二人、神と汝、これなり。乾坤無往、同行二人の義こゝに於て釋然たり。

●人生の趣味

信仰ありて初めて人生に趣味あり。慰樂あり。平和あり。意義あり。信仰なくして吾人日々の生活に何の意義かある。如何に苦しき生活も、賤しとする仕事も、堪へ難き悲哀も、信仰ある者の前には、美しき色と香と力と意義とを感せしむ。人生の趣味はこゝにあり。

●名目

我は名目を忌む。天地人生の間に働く不可思議なる力を感得せずして、僅かにその把束し得る點を捕へて、或は物理の法則なりといひ、或は心理の法則なりとして驚きもせず、怪しみもせず、又更に、之を神聖視する能はざる、世の所謂學者なる者の皮相淺薄なる頭腦を憐む。彼等は唯名目に囚れ居るなり。

物理とは何ぞ、心理とは何ぞ、是れ不可思議なる神の力の顯現の一部分のみ。何ぞ更に百尺竿頭一步を進めて、その堂奥に入りて究めざる、何ぞ神秘不可思議なる神を認めざる。神聖を感ずることなくして、科學萬能を謳歌するものは、決して徹底したる者にあらず。この輩未だ以て學者の名を値せざる者なり。

天地の理法を知りて神を知らざる所謂學者よりも愚昧無知すべて
のものを神として拜する迷信の徒の方が寧ろ真理に觸れて居る者な
り。

我は光熱重力電氣等を冷かなる一の理法として見るよりも光の神
熱の神重力の神電氣の神として之を拜せむことを欲す。

● 獨歩の悲境

故國木田獨歩は不幸薄命の天才なりき。彼が最も悲境に沈淪した
る時自らその状を告白して曰く、今吾を責むる者五、曰く愛の破壊曰く
貧困曰く無職業曰く自暴自棄曰く天地悲觀これなりと。あゝこれ人
間悲哀の極にあらずや。妻に棄てられ貧乏に責められ糊口の途鎖さ

れ努力の元氣を失ひ自ら己を卑下し且つ又神を信せず未來を信せず
徒らに天地人生を悲觀するに至つては是れ即ち地獄なり。獨歩自ら
之を言ひて曰く、『此身は今地獄の中央に立つ。火焰なき劍鎗なき熱
湯なき何もなき荒野の如き地獄の苦しくもあるかな。』と。實に同情
に堪へざるなり。

されど獨歩は遂に試練に打ち勝てり。彼は遂に信仰を喚び起して
是等の責苦を破壊し去れり。彼は斯して偉大となりぬ。

この世に於てあらゆる不幸災厄に遭逢する者若しよく之に堪へ之
に勝ち之によりて鍛錬されるれば遂に達する處は信仰なり幸福なり安
心なり平和なり。

我れ今我身を顧みて獨歩に比する時至福至幸の身たるを思ふ。忠
實なる妻あり。スキートホームあり。富なしと雖も衣食に窮せず。

年齒漸く多きを加ふと雖も、尙ほ將來に希望あり、抱負あり。而して衷心深く神を信ず。これ我が幸福なり。されど若しこの幸福に狎れ、苟くも増長倦怠の心を起さば、その沈落する處の不幸は獨歩の不幸よりも更に一深酷なるものあらむ。悲惨酷迫の境遇に墮せむ。寸時も感謝の心を忘れず、謙讓以て善事を勵み、努力して以て意義ある生を送らむには、又獨歩よりも更に一幸福を感じ、平和を思ひ、平安爲樂の人たるを得む。猛省せずんばあるべからず。

●偉人と凡人

偉人とは如何なるものぞ。凡人とは如何なるものぞ。自ら以てエラクなしと思ふ者之れ偉人なり。自ら以てエラシと思

ふ者之れ凡人なり。偉人の常に謙遜にして、凡人の常に驕慢なる所以は茲に存す。

自己の無知無能、心の空虚、自我の無を悟り抜きて、何處よりか我ならざる絶大の生命と能力の入り来るを自覺して自ら戦く、是れ偉人の心事なり。之に反して、自己の小智小略を知らずして反つてこれを矜り、鼻をうごめかして得々たるもの、是天下滔々たる凡人の常態なりとす。人間の知り得る處幾何ぞ。人間の爲し能ふ處幾何ぞ。凡人はこれを思はざるなり。

●發憤せよ

大疑の底に大悟あり。大悲哀の奥に大歡喜あり。死の谷底に墮落

偉人と凡人、發憤せよ

して、初めて大生命だいせいめいに觸るゝことを得るなり。發憤はつげんせよ。大に發憤せよ。

● 妙の一字

我は理窟りくつの宗教しゅうきやうに飽あけり。我は神祕しんぴの境きやうを愛あいす。あゝ神祕なる哉、神祕なる哉。神祕なき處ところに宗教しゅうきやうなし。人若し我宗教わがしゅうきやうを問とはゞ我はただ『妙めう』の一字を以て之に答へんのみ。

● 女に道を聽くべからざるか

我今日立つて大に某婦人の信仰しんぎやうを説く。人皆傾聽けいしやうす。獨り囚とはれ

たる宗教しゅうきやう家は、甚だ不興ふきやうの色を示して曰く、『女風情にょふうじやうに道を聽くは不見識ふけんしきの事なり。』と。是れ果して不見識ふけんしきなるか。

大工の子なるの故を以て、基督きりすとの教へに耳を傾けざりし猶太人の愚は、我これを採らず。人を見て真理しんりを見ざるこそ不見識ふけんしきのことにあらざるか。韓退之かんたいしも此事を言ひて、後輩こうはいと雖も我より優まさるあらば、就いて以て師とせむ、先輩せんぱいと雖も道の聽きくべきなければ、敢て下くだらずといふが如きことを言へり。真理しんりの前に男もなく女もなし。道は老若らうじやくによりて差異さ異なるべからず、真理しんりは男女によりて正否せいひあるべからず、至誠しせいを言ふ者あらば就いて聽きくべく、真理しんりを説く者あらば往むかきて以て學まなぶべし。心を虚きよにして神の聲を聽きく者は、凡て皆我が師しなり、我が兄弟けいだいなり、我が良友りやうゆうなり。

あゝ何ぞ形色けいしきよくに囚とらはるゝ者の多きや。

妙の一字、女に道を聽くべからざるか

●何ぞ驚かんや

何處にも何人にも容れられざるは、遂に我が運命なるか。何れの時か、孤獨の悲哀を感じるの時來らむ。教育界よりも、宗教界よりも、思想界よりも、藝術界よりも、實業界よりも、あらゆる方面より棄てらるゝに至らむ。これ當に然るべきことなり。これ我が本望なり。乾坤無住同行二人を覺知する者、何ぞこれに驚かんや。來れ、我に定められたる運命よ、來れ。

●自殺か信仰か

今日、遂に鼻崩れて繃帶を以て之を包める年若き貴婦人に遭ふ。遭

傳か、將又罪惡の結果か。何れにしても天罰なり。天罰もこゝに至りては、餘りに慘酷なるを思ふ。場所もあるべきに、顔の正面、鼻の上にこの病毒の發露を見むとは！
この婦人は人生を如何に觀ずるか、かゝる恥を忍びても、なほ生きんとは如何なる心ぞ。人間の『生』を欲する、斯くも強烈なるものなるか。我れ若し此の貴婦人たらば如何。悔い改めて信仰に入らむか。死してこの恥を免れんか。生きてこれに堪ふる能はず。あゝ、自殺か、信仰か、我が採る處は此二者の一あるのみ。

●これなり、これなり

損するも可なり。騙さるゝも可なり。知ると知らざるとに關せず、

何ぞ驚かんや、自殺か信仰か、これなりこれなり

あらゆる人にあらん限りの力を盡して親切の誠を施さむ。多くの場合、親切は自己に何等の費す處なくして、人に多大の慰樂を與ふるものなり。

交換的の親切は、我れこれを嫌ふ。交換的の親切や愛や、これ親切にあらず愛にあらずして利己なり。親切と愛とは犠牲的ならざるべからず。獻身的ならざるべからず。

我は奮つて親切を盡さんことを欲す。この身を以て親切の權化となし、一日一年一生を親切の行爲を以て満たさむことを希ふ。神よ願はくば、吾が存在を以て博愛と同一義たらしめよ。

サミュエル・ジョンソンは、つとめて乞食に施しをなせり。一婦人これを笑ひて曰く、『ジョンソンの與ふる處の金は空費なり。たゞそれ乞食の煙草の煙となりて消ゆるのみ。』と。ジョンソンこれを聴きて

曰く、『おゝ、然るか、然るか、然らば我は愈々これを惠まざるべからず。乞食と雖も何等かの快樂なかるべからず。』と。

これなり、これなり、この心なり。吾人はこゝに學ぶ處なかるべからず。

●我性の兩極

我性には兩極あり。静を好むと共に動を愛す。孤獨を樂しむ心ありと共に、交友を悦ぶ心あり。嚴肅を好み又快樂を愛す。泣き又笑ふ。涙を以て祈る心あり、酒を飲みて唄ふ心あり。陽の心あり。陰の心あり。是れ果して矛盾か。否、斷じて矛盾にあらず。

我がこの兩性を知る者は、これ眞に我を知る者なり。其一を知つて

他を知らざる者は、未だ我が知己と謂ふべからず。我を仙人の如く思ふ者、我を蕩兒の如く思ふ者、共に過てり。

又、我がこの兩性を見て、未だ其統一する處を知らざる者は、我を評して偽善者と謂はむ。この兩極の性あるを以て偽善者なりとせば、我は實に偽善者なり。我は甘んじて偽善者の名を受けむ。否、偽善者たるを矜りとせむ。

● 讀め 讀め

讀め、讀め、大に讀め。何を？

必らずしも文字を以て書かれたる書籍に限らず。——書籍は寧ろ讀まざるが可なり。これ我に共鳴し我を效へ我を導く書は、極めて稀な

ればなり。若しそれ、この我に與へられたる書籍、即ち第二の我と思ふ程共鳴するものあらば、大にこれを讀むべし。接吻を以て讀むべきものあらば、大にこれを讀むべし。又、大に讀まざるべからず。讀むべからずと制せらるゝも、これを讀まずんば措くべからず。

されど、此の如き少數稀有の書籍を外にして、人生を讀め、自然を讀め、自己を讀め、自己の經驗する一切の出來事を讀め、自己の接觸する凡ての人、凡ての事物を讀め。誘惑來らば誘惑を讀め。戀愛生すれば戀愛を讀め。歡び來らば歡びを讀め、悲哀來らば悲哀を讀め。病氣も失敗も非難も將又死も、總て皆これ天の與へ給へる書籍なりと知れ。讀むべく授け給へる書籍なりと知れ。これ思想家の心事なり。この意味に於て、我は思想家たるを自覺す。

オリヂナリチーの人が思想家にして、インタープリテーションの人

が思想家にあらずとせば、我は決して思想家にあらず。或は一種の詩人なるべし。蓋し我が才能は人生を觀、天地を觀、無限を考察して其意義を闡明するにあり。このタレントを有する者を、詩人と稱するの當れるや否や、我れ之を知らず。美をのみ賞して之を歌ひ、之を讀へ、之を書く者を詩人と云ひ、其他に詩人なるものなしとすれば、我は詩人にあらずるなり。我はそれ果して何物なるか。われこれを知らず。遂にこれを知らず。たいそれ萬有を讀んで以て生くるのみ。

●人様々

世には愉快に人と語ることも能はざる人あり。物を言へば人の感情を害ふが如き事のみ言ひ、尋常のことを言ふも人の心に逆ふが如き口

吻を漏し、兎角相手の快感を破るが如きことを言ふ。彼は故意にかく云ふにあらずして、自然に此の如き言葉遣ひをなす人なり。此の如きは、その性分にして、先天的に然るものなり。かゝる人は同情すべし。氣の毒に堪へざるなり。若し此の如き人あらば、自ら慎みて世間を遠かり、交際を減じ、獨りにて能ふ仕事を選ぶべきなり。

又、世には交際に拙なる人あり。自ら本氣になりてつとめて交際の圓滑を心掛くるも、なほその誠心に添はぬ人あり。物を言ふも場合を誤り、事を行ふも折に合はず、常識なしと言はむか、機智なしと言はむか、兎角見當違ひのこのみ言ひ、場外れのことを行ひ、人より嫌はれ、冷笑され、倦厭せらるゝ人あり。學問あり、思想あり、富あり、身分あるも、なほ先天的に交際拙なる人あり。かゝる人も亦、可成交際場裡より遠かるべきなり。

以上二種の人の外に、意味なきことのみ言ふ人あり。己れは意味あり趣味あり、價値あることを言ひ居る積りなれども、聽者の耳には何の意味も面白味も價値もなく響くものあり。言葉は立派なるも何ものが缺け居るなり。精神が籠り居らざるなり。

物言ひてよくこれを人に徹底せしめ得る人、よく人をして共鳴せしめ得る人、よく人に快感を與へ得る人、よく人の心に我が言ふ以上の思想や感情を喚起し得る人、此の如き人は徳ある人なり。

更に一步を進めて、我れ物言はずとするも、唯そこに同座するだけに、人に歡びを與へ、快感を加へ、崇敬の念を起さしめ、ある一種の能力を與へ、向上的インスピレーションを與へ得る人は、これ至高偉大の人なり、徳化の人なり。テニソンは實に此の如き人なりしといふ。人の修養は此點にまで達せざるべからず。

●道は傳ふべからず

道は傳ふべからず。信仰は強ふべからず。たい、これを求めんとする人によりて繼がれ、求めんとする人によりて得らる。

●籐椅子

日暮れて萬籟寂たり。燈火を滅して縁に出で、籐椅子に凭りて涼氣を味ふ。家人皆外出して我れたゞ一人、心のまゝに孤獨を悦しむ。大空星光二三、庭裏影薄暗し。

眼を閉ぢて心を空しくすれば、神來つて即ち耳語す。宇宙無聲の時なし。君子は無絃の琴を擁して、無聲の神韻を味ふ。悦自ら此中にあ

道は傳ふべからず、籐椅子

り。

聲

涼風懐に入る。快言ふべからず。此風何處にか去る。心なくして
 來り、心なくして去る。しかもなほ心あるなり。我と風と遂に異なる處
 なし。その心は常に寂しく、その實は常に閑なり。されど自ら妄して
 自ら紊る。失己れにあり。何ぞ他を言ふべけんや。人は遂に孤獨な
 り。乾坤無住、吾と神とたゞ二人、これを稱してひとりと云ふ。

道を説く者あり。教を傳ふる者あり。説くは好し、傳ふるも好し、信
 せしめむとするは迂なり。道を聽かむとするは好し、教を學ばむとす
 るも好し、されど之を信せむとするは愚なり。人の味ひ人の信じ人の
 頼らむとするは、たゞこの孤獨一人の吾のみ。ひとりのみ。たゞこの
 ひとりに還れ。これ信仰なり。安心なり。立命なり。

試に絶海の孤島の上に一人立てば、意地も伊達も、義理も人情も、倫理

も、道徳も、社會も、國家も、この一人の吾にとりて遂に何の頼りぞ。その
 時の寂寥を味へ。その寂寥を以てこの實世間に對せよ。人情、義理、伊
 達、意地、倫理、道徳、皆自ら生じ來らむ。こゝに處するをこれ處世といふ。
 平和自ら其間にあり、慰樂自らその中にあり。

人生は遂に孤獨なり。ひとり來てひとりで歸るなり。

月出でぬ。松影婆娑、四隣依然として沈々、我心たゞ寂し。五尺の小
 軀を此大宇宙の間に介して、我はそも何をか爲さむとする。此心は以
 て萬有を宿すべきも、此身は以て一國を宰し難し。人心の不平、こゝよ
 り生じ來り、靈乎肉乎の叫び即ちこゝより起る。竟に何の値する處ぞ。
 仰げば本有常住の月輪、千年その光を變へずして、無明煩惱の雲を拂ひ
 て皎たり。小と云はず、大と云はず、凡と云はず、非凡と云はず、實相眞如
 の日輪は生死長夜の闇を照して燦たる此大眞理に逢會せずんばあら

す。人心の妙機は要するにこの一轉化の貴きに存す。
 老いたるも滅び、若きも滅び、聖人も死し、罪囚も死す。善惡一如死生
 一如萬有みなこれ竟に一に歸す。一は空なり、零なり、無なり。向上も
 空、歿落も空、貴賤貧富皆空、人生希くはこの空を觀じて、涓々流れ流れて
 止まざる谿水の如き閑然たらむ哉。——月光漸く鮮かなり。これ今の
 我心なれかし。

●自警

我、最早や長き生命を求めず。三年の時を得ば我は満足せむ。
 三年！
 基督は三年の時を以て、その大事業を完成したるに非ずや。

言ふを止めよ。前途！ 前途！
 前途！ 前途！ と云ひつゝ、遂に何事をも爲さずして終る人幾何ぞ。
 三年を求むる勿れ。二年を求むる勿れ。將又一日を求むる勿れ。
 今ぞ汝の起つべき時なり。
 準備の時は已に過ぎたり。今ぞ叫ぶべき時なり。今ぞ汝の使命を
 果すべき時なり。

Now is the moment, now is the hour!

出でよ。日蔭より出でよ。

今叫ばずば、汝の口は永遠に緘せられむ。今爲さざれば汝が地上の
 生命は、直ちに滅び去らむ。

Speak now, or be silent forever!

これ我良心の聲なり。我神の聲なり。これ實に天の聲なり。

我はこの莊嚴なる聲に對して、何とか答へむ。

Yes? or No?

答ふるは易し。答へて之を行はざれば、これ天を欺くなり。

神よ。爾は我を識り給ふ。我は唯求む。信仰！ 勇氣！

●我已に死せり

死！

死の問題は我に肉迫し來りて、連りに我反省を促す。

一人の青年俄かに病を得て死す。彼は外國語學校を卒業して後三年、其事業漸く其緒につき、之より愈々活動せんとする時に當つて、卒然として永逝し去りぬ。時を同じくして、一人の恩人病歿す。彼は我生

命の親なり。一ヶ月前相見し時、共にその健康を祝せるに、今既にその人や在らず。その遺骸を送りし翌日、明治大學の授業を了へて校門を出でんとする時、其處に一老媪倒れて街頭に死せるに會す。かくして、我は一時に『死』の前に引き出さるゝこと三回、『死は如何に、死は如何に。』と、天が我心の戸を叩き、我反省を促し給ふ如く感じぬ。

凡ての人皆知るが如くにして知らざるものは『死』なり。生ある者は必らず死す、生者必滅の理を知らざる者は、一人もこれあらざるなり。然れども『死』に觸れし者はこれあらず。又、觸るゝことは容易のことにあらず。

人は理窟の上の死を知ると雖も、實地の死を知るものなく、自ら死する其時は之を知らざるなり。而して皆、死に臨んで俄かに狼狽し、恐怖し、未練なる舉動をなす。

我も亦死に觸れたることなし。眼前に親の死を見たり。娘の死を見たり。されど未だ『死』の顔を見たることはこれあらざるなり。我は我神經の鈍にして、感覺に乏しきを嘆す。時には自ら我身を捉つて感覺を喚び起さんとつとむ。然もなほ我感覺は未だ死を感ずることなし。死は遂に見るべからざるか。死は遂に感ずべからざるか。我は死を欲せずと雖も、死の顔を見むことを欲す。

我は『我れ已に死せり。』と覺悟せることあり。數年前、最も深刻にこの自覺をなせる時、その記念として墓碑を造り、雜司ヶ谷の墓地に建てたり。我はこの自覺によりて、自らを鞭撻しつゝあり。名利の心生ずる時、肉慾情慾に驅らるゝ時、墮氣の發する時、邪念妄想の起る時、不平憤怒の心の湧く時、我は常に『我れ已に死せるに非ずや。』と叫んで、自己を覺醒し、自己を誠む。今有する此の生命は、我有にあらすと思ふ時、

一切の邪智妄想は消え失せ、妄念邪慾は滅び去り、善に向つて猛進するの勇氣に滿つ。死したる身を以て世に起つ、天下何の恐るべきものあらむ。『其生命を惜む者は之を失ひ、其生命を失ふ者は之を得。』とは、實に千古の金言なり。

我友人に一年を以て其生命と觀する者あり。彼は毎年その元日に於て遺言狀を認むるを例とす。百年も千年も生くるが如き思ひをなして、ダラシなき生涯を送る者に比して、彼の如きは堅實なる生涯を送る者と云はざるべからず。されど一日を以て其生命となし、日々緊張したる生涯を送る人は、更に堅實なる人なり。一瞬を以て其生命となし、時々刻々に悔なき生を送る人あらば、更に更に堅實なる生涯を悦しむべし。これ賢なる人なり。芭蕉翁その死の床に臥せる時、枕頭の門人等その辭世の句を求む。芭蕉即ち既に作れる我句すべてこれ我が

其日々々の辭世なり。皆これ我辭世の句なりと答へて、この求めを拒絶しぬ。これ翁の貴く又偉大なる點にして、翁はその刹那々々の間に、全生涯を開拓しつゝ、一生を送れること、これによりて明らかなり。一年の生命、一日の生命、一瞬の生命、皆可なり。之を自覺してこゝに實行の光輝を發しつゝ、進む人は、貴ぶべき人なり。されど我は死を過去に見て進まんことを欲す。即ち『我れ已に死せり。』との自覺を以て餘命を送らんことを欲す。

亡き我と思へば嬉し年の暮

是れ余が成年の歳暮の感なり。

●破門と信仰

一人の乞食あり。彼は今年六十二歳の老嫗なり。彼女人に物を乞ふと雖も、多きを望まず。たいその日一日の糧を欲するのみ。常に東京の郊外を逍遙ひて、草に木に蟲に鳥に水に雲に悠々平和なる天地の推移に身を委す。彼女の樂しみはたい生くることのみ。

彼女に住居なし。雨の夜は民家の軒又は木蔭或は辻堂などの下に眠る。月照る夜は歩き疲れて倒れたる處に臥す。乾坤無住、禽獸の如く鳥蟲の如く朝暮す。

彼女は嘗て一富豪の下婢たり。二十一歳にしてその邸に入るや、主人よく彼女を愛して以て、一生その家に召仕ふべきを約す。彼女大に悦び且つ満足し、我家の如くその邸に起臥し、忠實に働きて何時の間にか女の盛りも過ぎたり。壯年も過ぎたり。齡四十六歳に至つてなほ獨身たゞそれ主家の爲に務めて満足せり。彼女に不安なく憂へなし。

彼女の足らざる處はたゞそれその夫なきことのみ。然るにその年、不圖したる心より下僕と通す。他に又一失ありて主人の激怒を買ふ。主人その初めの約を忘れて、遂に彼女を逐へり。

逐ひ出されたる彼女は狼狽せり。殆ど喪心せんとせり。彼女の一生は主人に獻じたるものにして、主人またこれを享け、その一生に何等の不安あることなかりしなり。彼女は先づ我家に歸りぬ。父母既に歿して家は人手に渡れり。彼女は親類に頼り行きぬ。彼等はその初め良縁ありし折、彼女に説く處ありしも彼女が主家に一生を托したりとて應せざりしが故に反感を抱きて容れず。彼女は萬策全く盡き果て、身を水に投じて死せんとせり。然れども果さざりき。

一夜街路を逍遙ひける時、偶々基督教會堂の前を過ぐ。説教あり。心を求めむとする彼女は、せめても神の助けを得んとして入りてこ

れを聴けり。彼女は大にその説教に感じたり。その後屢々その教會に通ひ、遂に信仰を得て洗禮を受けて以て信者とならむとせり。

洗禮を受けんとする前夜、彼女は靜かに考へたり。此時電光の如く彼女の心鏡に閃けるものあり。そは主家を逐はれたる時の心なりき。彼女は驚き恐れ戦き且つ叫びぬ。『主に頼る者は必ず逐はれむ。』と。

彼女は洗禮を受けざりき。而して此時より教會に通ふことなかりき。

彼女は此時より放浪の身となりぬ。乞食となりぬ。されどその心の平和は、主家にある時よりも更に安かりき。神に祈れる時よりも更に樂しかりき。彼女は自ら醒めたるなり。斯くして彼女は禽獸の如く朝暮する間に、人の想ひも及ばざる平和と歡喜と安慰とを悦しみつあり。

彼女の下婢となつて主家に一生を托したるは、以て洗禮を受けて信者となれるに例へつべし。彼女の忠實に主家の爲に務めたるは熱心なる信仰の人となつて神に仕ふるに比すべし。彼女の一失あつて主家を逐はれたるは、禁戒を破つて破門せられたるに比すべし。

今日の宗教なるもの實に此の如きものなり。熱心なる信者と云ふも、一旦破門せられてその教會を逐はるゝや、彼の下婢の如く狼狽し喪心せんとするなり。而してその教會を去りて他に行くも、他の教會も將又他の宗教も、彼を享け容れて呉れざるなり。此時に當つて彼は愈々狼狽し怖れ慄き遂に死せんとするに至る。生きて生き甲斐なき身となる。これその衷心眞に信する處なくして、たゞ主の有り難く貴ぶべきに盲信して身を托せるが故なり。此の如き信仰を以て何ぞ大安心を得ることを得べけんや。

基督教と云ひ、佛教と云ひ、回教と云ふも、要するに宗派の名のみ。主人の名のみ。これに頼りて安心を得るも、要するに彼の下婢の安心のみ。若しよく大悟徹底したる眞の信仰に入らば、宗教の名を超越して自己の宗教に入るべし。これ信仰なり。

基督教に頼るはよし。されど、去つて獨立するを得ずんば、終生僕婢の心遣ひあるを忘るべからず。佛教を信するはよし。されど、極樂往生をのみ望んで、彌陀佛の助けにのみこれ頼らば、終生乞食の虚禮を敢てして頭を下げ居らざるべからざるを忘るべからず。

安心は唯一つのみ。自己の宗教を自得するにあり。この自得の方便手段として、基督教佛教或は他の宗教に道を問ふは吾人これを咎むる處にあらざるなり。

彼女はよきことを言へり。『主に頼る者は必らず逐はれむ。』と。吾

人は此の語に大なる眞理を認めずんばあらず。
 主家を逐はるゝも、破門せらるゝも、驚かざる平安悠々の心あるを要す。狼狽せず喪心せず、餘裕ある心あるを要す。如何なる場合に於ても天地の眞善美を觀得する餘裕ある心を要す。これ眞の信仰なり。神を拜し佛を念するが如きは、これ信仰に非ず、奴婢の主に従ふ心なり。

●生前死後

思へ。百年の前我れ在りしか。今生ける人百年の前何處に在りしか。百年の前人は在りき。されど今現存せる人は一人もこれ在らざりしなり。肉眼に見えざりしなり。我生前は實に斯くの如くなりき。我はたゞ百年の前の歴史を聴くのみ。想像するのみ。盲信するのみ。

想へ。百年の後我れ在りや。今日現存する人百年の後此世に在るか。百年の後人はあり。されど今日現存せる人は一人もこれあらざるなり。我死後は實に斯くの如し。我はたゞ百年の未來を想像するのみ。揣摩するのみ。
 過去も無窮なり、未來も無窮なり。而して現在は一瞬のみ。人はこれを思はざるなり。生前を思はずして死後をこれ思ふ。楯の半面を見るは何ぞ異ならん。斯くの如くにして人生竟に解すべからず。
 過去を想ふ者は歴史を見る。歴史は形骸のみ。骸骨のみ。人間の記録と傳説は以て人生を解するの參考資料とはならざるなり。吾人は未來の空を想ふが如く、過去の空を想はざるべからず。過去に對して大膽なるが如く、未來に對して大膽ならざるべからず。過去に對して安心なるが如く、未來に對して安心ならざるべからず。

我は今生く。而して死は遠からずして到る。生後死あり。人はこれを疑はず。生前何ものかありし。人は之を想はざるなり。死後何ものかある。人はこれを想ふ。而して生前は之を意とせず。過去は葬られたり、之を語るべからずとするか。あゝ、迷へる者よ、爾何すれぞ生前の平和に還らざる。

●豚の如く生きて

今の人、は王者の如く死せんと欲して、豚の如く生く。我は寧ろ王者の如く生きて、豚の如く死せんと欲す。
金銀財寶遂に何の値するものぞ。粗衣粗食、爪に火を點じて、たゞこれ財を得んことをこれ努め、豚の如く汚穢醜惡の檻中に生きて、富成り

寶山を成すに及んで空しく、眞珠を留めて此身は死滅す。生前の辛苦艱難遂に何の値する處ぞや。これ豚の如く生きて、王者の如く死する者なりと雖も、顧みて其の生に何の意義かある。彼の營々として富を求むる者、名利榮達を之れ希ふ者、形色を逐ひ、人爵に眩惑して之れ生くる者、皆これ豚の如く生きつゝあるなり。而して彼等は皆王者の如く死せんと念ず。王者の如く死すと雖も、これ何の誇る處ぞや。
釋迦や基督や、ソクラテスや孔子や、芭蕉や西行や、彼等は皆王者の如く生きて、豚の如く死せり。名を之れ逐はず、富を之れ欲せず、住居邊服これ飾るなく、然もその心は常に平和に、天地自然の風光をこれ悦し、み大道の轉移に之れ従ひ、悠々自適隨處に主となつて生死を還るに委す。こゝに平和あり。慰樂あり。活動あり。その世界は濶く、その生は安し。豚の如く死すと雖も、彼等の生命は悠久なり。

豚の如く生きて

719

●外皮のみ

今の宗教家の説く處、多くは之れ宗教の外皮のみ。彼等は未だ『實在』に觸れ居らざるなり。神信仰、永生、無限、自己、死！ 彼等何の知る處かある。知らずして之を説く。憐れむべきは世の所謂宗教家なる哉。

よく知れ。よく悟れ。宗教は空想にあらず、言葉にあらず、理窟にあらず、恐れてなほ懼るべき『實在』なることを知れ。

●唯それ信ぜよ

我が生れざる前世は此の如くありき。我れ逝きて後も、世は此の如

くあらむ。我れ過去を思うて茫然たり。未來を思うて又茫然たり。此の石は我が生れざる前より斯くの如く我が死後も亦斯くの如し。此の水も亦然り。此の街、此の人々、この世の中、凡て此の如く在りて、此の如く在らむ。我も亦今茲にあり。暫らく茲にあり。正に茲に在り。たい不思議なり。不思議なり。これを思ふ時我はポーツとして氣の遠くなるを覺ゆ。

我は何ものにか頼らむ。我はそも何處よりか來りて、何處にか往きつゝある。生るゝも不思議、生存も不思議、死するも不思議——今こゝに在る最も大なる不思議なり。

天地は悠々たり。我を顧みるが如く、顧みざるが如く、我を知るが如く、知らざるが如し。我のみたい此の問題を思ふ。あゝそれたゞ信ぜよ。

●日誌の人

何を爲すが我が本性なるべきか。我に爲すべく與へられたるものは何乎。我が本職は何乎。教育家か否。宗教家か否。文學者か否。詩人か否。哲人か否。事業家か否。演説家か否。文章家か否。見れば、我を呼ぶべき肩書はこれあらざるなり。我れ自ら之を知らず、他人何ぞ我を知らんや。

近頃靜かに我を思ふに、我は Sam Pepys の如く Diarist なり。この稱號最も我に適應するが如し。即ち日誌の人なり。

我は日誌を物するを最大愉快となす、日誌を記すに當つて、最大の満足を感じる。我が日誌とは『所謂』日誌にあらず。我が内的生命の日誌なり。時々刻々我心の耳朶に響く無聲の聲をその聴くがまゝに忠

實に書き留むるなり。

我が日誌の中には何事をも記すに足る。我が日誌の前には、社會の制裁もなし、法律の束縛もなし、道德の干涉もなし、たゞそれ我頭上に天あるのみにして、他に何等の權威あるものを認めず。我が日誌の世界は全然無法律無制限無拘束にして、眞に自由の天地なり。

我は自由を愛する最も切なる性を有す。或意味に於ては最も我儘なる性を有す。然るに一度び門を出づれば、到る處に多少の制裁と壓迫とを感じる。言ひたきことも憚つて言はれざることあり。思ふ事もそのまゝに言はれざることあり。好かぬことも好きたるが如き様子をせざるべからざることあり。人間の社會は義理人情體裁等によりて、存外窮屈なるものなり。こゝに人は何處にか自由の天地を持たざるべからず。自由奔放の生を悦しむ境地なかるべからず。我はこれ

を日誌に得たり。日誌を以て我が天國となしこゝに思ふ存分の我儘を働き眞の自由を爰に悦しむ。而してこの我儘と自由とは、神に在りて存するものなるが故に、我が勝手に書くものゝ中に、眞理の光りが何等の曇りなく、鮮やかに現はるゝことあるなり。

我はたゞ我が満足を得んが爲にこの日誌を物す。而してこれ我が世に在りて爲し得る、最善の事業なることを信ず。我は日誌を以て我畢生の最大事業となす。

●筆の瞑想

瞑想は筆によりてなすを可とす。徒らに眼を閉ちて静坐し、瞑想せんとするも、常人にありては、兎角妄念雜念のみ浮び來りて更に得る處

なし。されどチラと感じたる一點を捕へてこれを筆にし始むる時は、精神自ら筆の尖に集注して、それよりそれへと一途の思想湧き來り、遂に大眞理に逢著することあり。我は屢々これを實驗して、筆の瞑想の徒爾ならざるを思ふ。

●宗教の根本問題

幻影か現實か？ これ宗教の根本問題なり。神とか、未來とか、安心とか、立命とか、斯の如きは抑も末の末の末なる問題なり。この大自然を以て、意味なき幻影となすか。將又之を莊嚴なる大事實とするか。これ信不信の別るゝ處なり。自然も人生も人間も自己も、凡てこれ等のものに就きて、何も考ふることをせず、更に驚くこともせず、之を輕々

筆の瞑想、宗教の根本問題

に看過して、『運命なり、自然なり、成り行きなり、飲めよ歌へよ、今日ありて明日無き身なり。』なぞと云ふが如きは、これ不信の人々にして、凡ての實在を以て幻影と見做す者なり。然るに大自然を見て嚴肅なる事實なりと觀じ、眞直に森嚴に存在の不思議を感じ驚異の感に打たれ居る人は、これ信仰の人なり。眞の宗教家なり。

●我が好む書

或人我に我が好む書を問ふ。我れ答へて曰く、『かく限られては返答に苦しむも先づ最も嫌ひなるは神學的議論の書なり。次には理想も主義もなき新聞の三面記事に類する安つばい小説や物語が嫌ひなり。法律經濟物理化學の如きサイエンスに關する物は、餘り讀まざる

を以て言ふに足らず。我は深遠にして謹嚴なる思想家の書物を愛す。一般的に言へば哲學的の書籍を愛すと雖も、時間空間などの問題に没頭する純哲學は之を好まず。エマソン、カーライル、テニソン、ウオース、マヂニー、トルストイ、アミエル、老子、莊子、陽明、芭蕉、西行、此の如き人々の書を愛し、常にこれに親しむ。殊に此の如き偉人の遺したる日誌、書簡等は非常なる興味を以て讀む。兎に角、血と涙とを以て書かれたる書は、接する毎に必らず尊敬して之を讀む。而して好きでありさうにして、餘り好かざるは卑近なる處世的教訓の書なり。例へば菜根譚の如きは、讀むも何等の興味を感せず。』と。

●凡てのもの有意義

無益の人に交り、無益の談話をなし、無益の時を過すは苦痛なり。一

我が好む書、凡てのもの有意義

日の間、無益のことをなしつゝ、無駄に消費する時間甚だ多し。されど全然これを避けること能はざるなり。自家の心を以て之を有益なるものに變化せしむるより外にその術なし。

嘗て友に誘はれて、明治座に樂天會を見る。面白しと思へば面白し。されど心を静めてこれを思へば、何の意味も価値もなし。されど之を観る人々は、我を忘れて笑ひ興じ居るなり。その演じ居る者、その見物し居る者、皆たゞその皮相なる一時的快感に、ウツ、を抜かしつゝあるなり。此のウツ、を抜かしつゝある者を見る時、こゝに一大演劇を見、喜劇を見、真理を見る。

常に心眼を開き居れば、無益の話の中にも、無益の事の中にも、無駄の時間の中にも、真理を見出すことを得。かくして無益無駄の中に有益の意義あるものを充たし行くことを得。

有意義の生活を爲す人の前には、總てのものみな有意義となる。有益となる。無益無駄のことはあるべからず。

◎生存の事實を知れ

生存の『意義』を知る前、先づ生存の『事實』なるを知れ。この大事實に觸れて、戦き懼るべし。

◎恐るべきは習慣

今日一人の女教師が、三四十人の盲目なる男女の生徒を率ゐて、街路を散歩しつゝあるを見て、哀愁の感に堪へずして泣けり。彼等は賑や

生存の事實を知れ、恐るべきは習慣

かに、愉快さうに、相戯れ相笑ひつゝありしと雖も、我はその愉快さう嬉しさを憐れなるに泣けり。その笑ひ悦しみつゝあるが可哀相なるに泣けり。

彼等は最早や盲目に慣れて、之を悔むの心なかるべし。彼等に取りては『暗黒』が自然なり。

こゝに世の人を見よ。目明きの人々を見よ。彼等の目はよく赤きを見、白きを見、醜なるを見、美なるを見ると雖も、その心眼は盲して一物も見えず。彼の盲兒の如く暗黒を自然として生く。而してその盲なるを知らずして、之を悲しみて泣くこともせず、これを悔む心もなく、その盲に慣れて満足し、衷心の安心と満足を得ずして空しく一生を終る。恐るべきは習慣なり。

●花よ星よ

花に對しては『花よ』と呼べ。花は悦んで爾と語らむ。星を仰いで『星よ』と呼べ。星は笑つて爾と物言はむ。眞心を以て對し、眞心を以て呼び、眞心を以て語る時、何ものか爾と呼應せざらむ。情を以てこれに對し、情を以てこれに接する時、何ものか爾と相通せざらむ。自然を友とすとは此謂なり。俳諧寺一茶翁が、禽獸草木昆蟲の如きものに至るまで、己が友の如く暖かき同情の念を以て、これに對しこれに接し、これを詠じたるは我が常に敬慕して措かざる處なり。眞情を以て對するにあらざれば、自然は決してその眞心を語らざるなり。その秘密を教へざるなり。

月よ、花よ、水よ、山よ、草よ、木よ、風よ、露よ、蟲よ、土よ、石よ、自然界のあらゆる

る美の使者よ。我を友とせよ。永遠に我を友とせよ。而して爾の美しき聲を聞かせよ。鈍き我が心を覺醒せしめて爾の美に接觸せしめよ。我は爾等と共に活きんことを祈る。爾等の呼吸する生命の氣を我も亦呼吸せんことを希ふ。我は虚偽の人間に倦けり。虚偽よ去れ。眞生命よ來れ。

●我とは何ぞや

『我我我』我とは何ぞや。我は如何にして生れ出でたるか。『我は茲に在り。』——この不思議に對して、何故に人は驚異せざるか。この莊嚴なる『事實』に對して、目醒めざる間は、神も未來も人生もすべて解るものにあらず。

この『現實』を感ずることなくして徒らに神を語る。凡てこれ空語のみ、寢言のみ、取り止めもなき嘔語のみ。何等傾聽の値なし。人よ、爾の『我』を見よ。爾の『我』を凝視せよ。而して苦しめ、泣け、驚け、感じて以て地に倒れよ、苦悶の涙を地に流せ。其時爾は何ものかを握つて起つことあらむ。そのもの即ち尊し。

●直覺あるのみ

我には智なし。されど直覺あり。我には才なし。されど直覺あり。我には學なし。されど直覺あり。我はこの賜物あるを感謝す。我は天地を直感して樂しむ。我は人生を直感して悦ぶ。我はわが裡に居ます神を直感して讚ふ。

我とは何ぞや、直覺あるのみ

凡て説明的せつめいてきのもの、理窟的りくつてきのもの、くだくしきもの、此の如きは我これを厭いとふ。凡て直截ちよくせつ簡單かんたんにして、深遠幽玄しんえんゆうげんなるもの、我之を好む。我が俳句はいくを楽しむは之が爲なり。

●書 け

書け。書け。今我が心は動きつゝあり。今我が心臓こころは烈しく鼓動こどうしつゝあり。

湖水の水動搖せば、龍の來ると知らずや。我が心動くは正に靈の感應おんがうなり。

此時、我は聴くまゝに書き、感ずるまゝに書く。凡てのことを放棄ほうきして、これを書くが義務ぎむなりと思ふ。書け、書け。

我が死の時は近ちかけり、これを自覺じかくして我は急いそぐなり。書き書きて、眼目めせむは我が願ねがひなり、満足まんぞくなり。

我が心は斯かく言へり。我心はかく感かんせり。

●大 詩 人

花を見て美びなりと言ひ、月を見て美びなりと云ふ。美とは何ぞや。形かたちにあらず。色にあらず。又我が心にもあらず。美は宇宙うちうの精神せいしんなり。見えざるソールなり。このソール花に現あらはるゝ時、人は花を美びなりと感かんず。このソール月を通して輝かがやく時、人は月の美を賞しょうす。山川草木各おのづかこれに精せいあり。精は宇宙うちうのソール也。花を花として見るを止めよ。月を月として觀くわんするを止めよ。凡て皆見えざる靈の顯現けんげんとして之を

愛せよ。花を歌ひ、月を賞するは小詩人に過ぎず。宇宙のソールを讚美する者、これを大詩人となす。大詩人は遂に大宗敎家なり。大豫言者なり。我國には芭蕉翁を措いて此種の大詩人なし。現代に於ては絶えて之れなし。嘆すべきかな。エマソン曰く。

“God has not made some beautiful things, but Beauty is the creator of the universe.”

●我住家

「乾坤無住」は我モットーなり。
 「爾」「爾」「爾」！ 爾は我が住家なり。
 光明は爾にあり。歡喜と平和とは爾にあり。無限と絶對と永遠の

命は、爾の裡に、あり。
 我心は爾に饑ゑ、爾に渴し、爾を憶る。これ我が衷心の叫びなり。然れども弱き我、信なき我、迷へる我なるかな。我は今も尙ほ暗き裡に彷徨しつゝあり。時には人の富を羨み、時には世の名を求む。去れよ煩惱。去れよ俗慾。
 「爾」よ。我を捕へよ。爾の強き腕をもて、我を捕へよ。我を爾の捕虜とせよ。我れ饑ゆるとも、爾の外に何ものをも與へざれ。
 爾のものなる我、我のものなる爾、爾と我と——こゝに我住家あり。
 永劫の住家あり。我は爾の前にかく祈るなり。
 我が永劫の住家は、爾の外にこれあることなし。

我住家

● 宇宙の中心

宇宙の中心は凡ての處にあり。

その居る處、即ちこれ宇宙の中心なり。我も亦宇宙の中心なり。

我、今、我を宇宙の中心として之を思ふ。その貴さよ、その長しさよ。足は戦き身は慄へ、眼眩みて倒れんとす。あゝわれかく懼れ戦きたる

ことなし。

上を仰げば無限なり。下を眺むるも無限なり。我は『無限』に覆はる。我は無限の兒なり。無限の中心なり。

この想果して實か、實ならば我はこの想に堪へざるなり。

“Welcome tempests! Welcome the passion blusts which stir the waves of the soul and so veil from us its bottomless gulfs!”

● 言葉のみ

今日まで書き來りしことなほこれ言葉たるを免かれず。信仰を書くことはそれ難い哉。真理を記することはそれ難い哉。難きにあらず不可能なるなり。

● 體得せよ

體得せよ。體得せよ。蟲一つだに體得せば、汝は宇宙の神祕を握るに足るべし。

●何れかノンセンスなる

人の爲す處我には悉くノンセンスと見ゆ。我がなす處人には悉くノンセンスと見ゆべし。
あゝそれ何れかノンセンスなる。

●たゞ靈光のみ

人よ、我に何ものをも求むる勿れ。學は我になし。才は我になし。辯舌もなし、文筆もなし、語學の才もなし、金もなし、何ものもこれなし。我にはたい一を求めよ。靈光のみ。たい靈光のみ。

●何れを擇ぶか

『汝迫害を受くる覺悟ありや？』
位置を失ひ、職を失ひ、貧困に陥り、世の物笑ひとなり、家族を路頭に迷はしめ、親戚にも見捨てられ、遂に立つ瀬もなく、犬死に甘んずるの覺悟ありや。

喜んでマター(殉教者)の運命に安んずるの心ありや。

この覺悟なくんば、汝は汝の使命を全うすること能はざるなり。汝試に起つて大膽に汝の信仰を表白せんか。曖昧なる態度を捨て、率直に汝の宗教を叫ばんか。その前にはたいそれ悲劇の幕が切り落さるゝのみ。

汝、十字架に掛かるの勇氣ありや。

何れかノンセンスなる、たゞ靈光のみ、何れを擇ぶか

あゝ碌々たる生涯に相果つるか、迫害を怖れずして信仰の前に光輝ある死を遂ぐるか、二者それ何れを擇ぶか。

●祈禱

神よ、我に火を與へ給へ。
神よ、我を窮地に陥れ給へ。
神よ、我をして止を得ずして起つを得しめ給へ。
斯の如き境遇に導き給へ。
斯の如き心を我に作り給へ。
或は内より、或は外より、我が行くべき道に猛進するを許し給へ。

●神我を識る

信仰を語るの友極めて鮮し。思へば孤獨寂寞の感に堪へず。人に我を理解せんことを求むと雖も、その及ばざるを知る。如何に同情ある友と雖も、全く我心を理解する能はず。
人遂に我を解せず、我を知らずと思ふ時、我は益々神に知己を求むるの切實なるを覺ゆ。我心のすべては、唯それ神に識らるゝのみ。人に、られざるは、神に識らるゝの意識を強くす。

『神は我を識る！』

此の信仰の中に、いふべからざる慰めあり。歡びあり。
エマソン曰く、『凡そ人は已を以て充分に世人より了解せられずと想像するものなり。然れども人の心に眞理の存在する以上、而して自

祈禱、神我を識る

ら神聖なる心霊を以て最後の休み場となす以上、その全く世俗より了解せられざるは當然のことなり。』と。

● 我は信ず

我は信ず。我は獨り信ず。信するが故に信ず。聖賢の教によりて信するに非ず。人の證明によりて信するに非ず。友の賛同によりて信するに非ず。凡ての者信せずと雖も、我は信するなり。たゞ信するなり。

我が信仰には何等のオーソリチーを有せず。宗教も哲學も道德も我れこれを顧みず。過去も現在も將來も、我れこれを思はず。唯直覺の信仰、我れこれによりて活く。我は信ず。信せざるを得ざるが故に

信ず。

● なほ一を有す

親も死ね、妻も死ね、子も死ね、孫も死ね、家も焼けよ、我が有する一切の物も焼けよ、位も名譽も位置も、職業も、友も、皆我を離れ行け。總てのもの絶滅し、又離散し去るも、我はなほ一を有す。このもの奪ふべからず、抜くべからず、亡ぼすべからず、永遠無窮、絶對無限の或もの即ち之なり。我はこれをのみ有とす。餘のものは我にとりて凡て無なり。有れども無きに均し。真空にして妙有とは即ち之なり。『貧しき者は福なり』貧の極は遂にこの富を悟るべし。

我は信ず、なほ一を有す

●そのホールを知らず

神は光なり。力なり。美なり。善なり。真理なり。人はみな日々是等のものに觸れ、且つ是等のものゝ裡に生く。即ち神に觸れ、神の裡に生くるなり。然れども彼等の知る處は、その箇々別々に之を知るのみにして、そのホール(全體)を感得せざるなり。是れ彼等が神を知らざる所以なりとす。

●思ふ

『思ふ』！これ人間の天より賦與せられたる大なる能力なり。『我れ思ふ』とは宇宙間に於ける一大事業なり。この微小なる人が極大無

●何

限の宇宙の中に在りて『思ふ』その事たる不思議中の不思議なり。我が思ふ處は無限の宇宙に波動を生じ、波動は又波動を生じて、永遠に消滅することあらず。こゝに在りて今思ふことは、直に神に通ず。偉大なる哉人の心、不思議なる哉人の思、かく思ひて我は我思想に大なる價值あることを信ず。かくして日々思ふ所をこゝに記するは、大なる業を爲しつゝあることなるを信ず。

我と同じ趣味を有する者甚だ鮮し。故人の中には之なきに非ず。今人の中には甚だ稀なり。日々接觸する者の中には殆ど之なし。故に我は外に快活なりと雖も、心中寂寞孤獨の感に堪へず。

そのホールを知らず、思ふ、何

抑も我趣味は、所謂宗教にあらず、又哲學にもあらず。禪味にてもなく、又俳味にもあらず。何か言ひ難きものなり。何か解らぬものなり。我は之を『何』と云はん。我れこの『何』を思ひて興じ、『何』を感じて動き、『何』に向つて進み、『何』を語り、『何』に生く。この『何』の貴さよ。之を解する人、之を味ふ人、之れ我と趣味を同じうする人なり。

●謙遜と尊大

謙遜と尊大とは決して矛盾ならず。
謙遜なき尊大は驕慢なり。尊大なき謙遜は卑屈なり。謙遜にして尊大の心ある人貴し。獨り偉人にしてこの心を有す。凡俗の人は驕慢にあざれば卑屈、卑屈ならざれば驕慢なり。謙遜にして尊大なる

は信仰の人なり。小我を殺して大我を得たる人なり。己を虚にして無限の靈を宿したる人なり。自己を以て瓦器となし、その中に無價の寶を有する人なり。我は無一物にしてなほその裏には無盡藏あるを自覺する人なり。謙遜と尊大とは、獨り此の人に於て矛盾ならず。
エマソン曰く、

“I am somehow receptive of the great soul.”

此言尊大なるが如し。されど彼に於て決して尊大ならず。

●人の心

人の心は、神殿にあざれば、伏魔殿なり。慎まざるべからず。

● 慣 習

我は梅を愛し、又櫻を愛す。

誰かその一をのみ愛して、他を愛すべからずと云ふか。嗚呼コンベンションナリズム！ あゝ因襲。

社會はコンベンションナリズムの團體なり。宗教にも之あり。道徳にも之あり。良心の聲にすらも之あり。コンベンションナリズムは大に非なり。コンベンションナリズムは片つ端より排斥せざるべからず。慣習、恐るべきは慣習なり。慣習は桎梏なり。我は之を脱却して自由の我たらざるべからず。

我には經典なく、傳説なく、輿論なく、法律なく、聖賢の教なし。我は唯我によりて思ひ、我によりて感ず。迅雷の如く我心に響く天來の聲の

外、我には何等のオーソリティーあるを許さず。我が思ふ處に過ちありとするも、我は我を信じて進まむのみ。

● 老ゆること勿れ

人は満足を求む。之を求むるは可なり。

常に現在に満足せずして、より以上のものを得て、満足せんと努力する處に希望あり。進歩あり。然れども一度望む處を得て、こゝに満足せんか、忽ちにして老衰と退歩と死とは必らず到らむ。故に不満なる人は福なり。

俗に三ばれといふことあり。一に曰く、妻に惚れ、二に曰く、家に惚れ、三に曰く、己が仕事に惚れて世を渡れと。これ人の以て可とする處の

慣習、老ゆること勿れ

處世訓なり。されど斯の如きは保守的思想なり。永遠に進歩せんと欲する者は斯かる思想に囚るゝことあるべからず。

我、今六十に垂んとして、なほ現在に満足する能はず、常に不平あり煩悶あり。我は以てこれを矜りとし、又幸福なりとなす。而してこの心あるを悦ぶ。人は我を以て老人なりと云はむも、我はなほ青年の心を有す。鬱勃として爲すあらんとする氣象あり。我は永久に老ゆることを欲せず。また老いず。老ゆるは萬病の基なりと古人は言へり。蓋し至言なり。老ゆる勿れ、老ゆる勿れ、常に若かれ、永遠に若かれ。老衰、我は之を蛇蝎の如く嫌ふ。

●竟に消滅乎

我は今もの言へり。暫くにして死す。最早や聲無し。我は今こゝに在り。暫くにして死す。最早や在らず。

あゝ、遂に消滅か？
靈魂は不滅なるか。消滅せすとすればこれ不思議なり。若し又消滅すとせば更に不思議なり。この不思議を痛切に感ずる人間なるものは、更に更に不思議なり。是等の不思議は、遂に吾人をして信仰を求めしむ。

●主人公

爾の心、何ぞそれ空虚なるや。爾の心は一の堂宇に非ずや。家屋に非ずや。而してその堂守は何處に在りや。主人は何處に在りや。主

竟に消滅乎、主人公

人公は常に不在にして、然も客常に至る。主人なき空家に來れる客は、常にその坐席を穢して去る。而してこれを掃き淨むべき堂守は如何。
高野長英の詩に曰く、

朱門深鎖春池滿。岸落薔薇水浸莎。

畢竟林塘誰是主。主人來少客來多。

主人來ること少にして客來ること多し。爾の心は正に之なり。家在りて主人これに住せず、客人恣にその空家を領す。爾の妄念雜念はこれその客なり。主たる神即ち靈は何處に在りや。

偶々主人公來ることあり。然も客たる妄念雜念は反つてその門扉を鎖して入れず。斯して爾の心は遂に客人の横領する處となる。こゝに墮落あり。争鬭あり。醜穢あり。煩悶あり。爾は斯くして荒む。爾の心に宿るべき主人公は靈なり。神なり。而して主人公その家を

を統裁す。こゝに向上あり。平和あり。歡喜あり。斯くして爾は活

◎人心の三門

人の心には三つの門あり。之を智門情門意門となす。此の三門は主人公の通用門なり。

主人公が智門より出で、世に現はるゝ時は、人これを呼んで識見といふ。情門より出で來る時は、これを仁徳と呼び、意門より出づる時は、正義の行動と稱す。然れども、此の如きは極めて稀なり。此の三門を横領して通過し來る者は主人公に非ずして自我なり。自我が智門より出づる時は、これ暗迷なり。情門より出る時は、これ利己なり。意門

よりする時はこれ醜行なり。斯くして人間社會には、暗迷利己醜行充滿す。

●子供と人生問題

今朝衣を更めて外出せんとす。女兒今年十二才なるが傍に立つて、まじくわが著更へせんとするを見守れり。その眼!! その口!! その顔!! 彼女は平和なり。我れこのあどけなき小天使に對する毎に衷心歡喜と感謝の念に胸躍らすんばあらず。然るに此の瞬間に於ては然らざりき。あゝこの平和なる小天使の上にも明かに死といふ未來の存するを思へるなり。我は云へり。

『〇〇子、一寸考へて御覽、今から百年も経つと、お父さんも、お母さんも、

死んで了つて居ないんでせう。兄さんも姉さんも、それからお前も皆死んで了つて居なくなるんだよ。お前のお友達もおばさん達も、今此の世の中に生きて居る人が、みんな死んで了つて誰も居なくなるんだよ。お前どう思つて?』

斯く言はれても、彼れ小天使は平然たり。たゞチヨツと目を睜りて、『お父さま、變ですわねえ。』

と、彼女には死の恐怖てふもの、あらざるなり。されど、此の、『變ですわねえ』の一語は、正にその稚けなき心の中に、人生問題を喚び起したるなり。

子供に向つて、未來を説くは爲すべきことにあらず。子供に對して、極樂を説き、地獄を語り、天國を教ふるが如きは不健全のことなり。かゝる思想は斷じて吹込むべからず。たゞ、彼等の心に、『變だ』といふ感

聲
じを喚起するを得れば足る。天地に對し、人生に對し、又自己に對して驚異の感を與ふることを得れば、以て充分なりとなす。親が子に宗教を教ふるはこれだけにて足る。これ以上のこと、この先きのことは、子供をしてその成長するに従ひて自得せしむべきなり。

獨り子供のみにあらず、凡そ人に對して、神の存在の議論をなし、又は、未來の有無を説教するが如きは愚の極なり。これ有害無益のことのみ。宗教問題に就きては、たゞ人をして眞面目に自ら考へしむることを得れば、以て説教者の大成功となすべきなり。否、これ人間の方にて爲し能ふ極致なり。是れ以上のことは、その箇人と神との交渉にして、説教者の開拓すべき處にあらず。要するに信仰は自得ならざるべからず。自得にあらざるものは虚なり、空なり、嘘なり、偽りなり。狼りに具體的宗教或は信條的宗教を説くは、偶々以て世に偽善者を作るのみ。

豈慎まざるべけんや。

●保守的人物

世には進歩的人物と保守的人物とあり。如何に進歩的氣象ある人と雖も、年を重ねて老境に向ふに従ひて、漸次保守的人物と化するが常なり。自ら知らざる間に、追々保守的に變り行くなり。

保守は老衰を意味す。保守は死の前兆なり。肉體の死も近づく。精神上の死も近づく。

人は常に進歩的なることを要す。若からむことを要す。齡は長じ肉は衰ふるとも、此の精神と此の思想とは、常に若からむことを希ふ。常に進取的活潑なる元氣に充ち満ちて在らんことを冀ふ。死ぬる其

保守的人物

の刹那迄進み進みて退まざらんことを願ふ。

保守的人物は、前後左右を顧みて、最も安全にして危険無き道を進まんとす。これに反して進取的人物は前途に光明を望んで、たゞそれに向つて猛進せんとす。人は此の如きを以て、突飛なりと云ひ、ラディカルなりと云はむ、されど進取的人物の矜りと光榮と希望とは茲に存す。

●天の命

レ我は天より遣はされたる者なりとの自信は貴し。その位置の如何を問はず、その職の何たるに關せず、其の位置に在り職に従ふは、これ天の命なりと信する人は尊ぶべし。會社に於て働く者も、學校に於て教鞭を執る者も、會社より傭はれ、學校より聘せられ居るといふことを念

頭より去つて、我は天の命する處に従つてこゝに在りて、この仕事をなしつゝありといふことを自覺せよ。言ふ時も行ふ時も、凡ての時總ての事皆、我は我を遣はし、者の命によりてこれを言ひこれを行ふものなりと信せよ。

基督は常に『我を遣はし、者』といふ事を口にせり。此の自覺と此の信仰とは、基督をして偉大ならしめたり。彼は直線によりて活動せるなり。横線によりて働く者は凡人なり。直線によりて活動するものは達人なり。

●疑ひ

疑ひの中に疑ひなし。されど疑ひは疑ひを生む。悟りの中に悟り

天の命、疑ひ

なし。されど悟りは悟りを生む。

●心鏡

心鏡は萬物を寫し心眼は萬物を見る。萬物とは肉眼に影する形體を備へたるものゝみの義にあらず。

●瞑目

眼を開いて吾人の視る處は一部分のみ。一方を凝視すれば他の世界を見る能はず。他の世界をも平等に見むとして右顧左眄すれば此心即ち紊る。如かず瞑目して何物も見ざらむには。

瞑目して、一物も見ず、心こゝに定まる時、吾人は萬物の我が心鏡に影じ、來るを見る。見ずして見るとは、即ちこれなり。

●註釋

俗人は註釋を要求し、真人は眞理を要求す。俗人に眞理を教へんとするも彼等は之を解せず。彼等に眞理を説きて、彼等よくこれを解せりと言ひ、又その眞理を信すと明言すと雖も、彼等の解し、彼等の信する處は、眞理そのものにあらずして、眞理の註釋のみ附帶物のみ。眞理は真人にして初めてこれを知る。眞理は自得のものなればなり。科學とはこの眞理の註釋の義なり。たいそれ糟粕のみ。

● 信 仰

信する人に信仰なし。説教する人に宗教なし。

● 宗 教

善にもあれ、悪にもあれ、汝の心を極度に押し詰めよ。此時に於て、初めて汝は宗教を知るべし、信仰を得べし。神を見るべし。所謂信仰、所謂禮拜、所謂祈禱などによりて、神は見るべからず。神すで見ざるべからず、況んや神の加護をや。

● 牢 獄

われは自ら牢獄を築きて、自らその中に押し籠められたり。五十年の生の努力は、遂にこの牢獄の建造に終り、牢居に歸著せり。學窓生活も巷の活動も、畢竟するに皆これ自らを押し籠めんとする努力に過ぎざりしなり。ハツと氣附ける今となつて、これを見る時は、時既に遅くして、門扉は堅く閉され、城壁は層幾層高きを加へたり。

あゝこの牢獄よ。壁も屋根も床も皆透明にして、坐してよく千里の外を見るに足る。山も川も野も原も、小鳥も花も蝶も、萬象悉くわが視聽を慰むるに足る。これ水晶の牢獄か、これ硝子の牢獄か。牢獄ならば何ぞあまりにそれ贅澤なるや。

然り、正に牢獄なり。坐して碧空を仰ぎ、日光を浴び、花鳥を悦しむに足ると雖も、不思議なる哉、この牢獄に苦痛あり。碧空はこれを仰げども、天候晴朗ならず、日光は直射し來ると雖も、その光り温かならず、獄は

透明體より成れるも室中極めて陰愁山川の風光一目の中に收まると雖もその景趣美ならず。身は健なるが如くにして健ならず閑なるが如くにして閑ならず動き難きが如くにして動かざれば措かず。苦痛なり、苦痛なり。これ程大なる苦痛はあらざるなり。われは自らこの牢獄を造りて、この牢獄の中に籠れり。あゝいつかこの牢獄を破りて大千世界に脱出するものぞ。

天の一角より聲ありて言ふ『身を捨てよ』と。

●未生以前

人は死後のことを憂へ、死後の安心を希ふ。これ可なり。されど、その生とその死とのみを考へて、未生以前のわれを考へざるは不用意の

ことなり。生死の問題を思ふ者は、未生以前のわれを先づ第一に思はざるべからず。

未生以前のわれは無にあらす。空にあらす。なほ生命あるなり。

●書籍を焼棄せば

試みに世上あらゆる書籍——經典も稗史小説も科學の書籍も——を焼棄せよ。これが爲めに自滅するもの、狂するもの、號泣するもの、狼狽するもの、その數幾千萬人なるべき。學者は忽ちにして愚鈍凡庸と化せむ。宗教家は忽ちにして昏迷懊惱せむ。ブックメーカーは忽ちにして路頭に犬死せむ。

未生以前、書籍を焼棄せば

●歴史を葬らば

試みに、此世より歴史といふものを除き去り、傳説を葬り、絶對的に過去を追想すること能はざらしめば如何。志士の弔ひもせず、偉人の讚美もせず、亡者の祭祀もせず、逝けるものを逝けるがまゝに放擲して追悼もせず、回想もせず、渴仰もすることなくば、此世に過去の偉人、過去の大事業などを追想して、これに刺戟せられて奮發心を起すものあらざるべし。榮達心も野心も名譽心も悉く亡失せむ。

歴史の人を迷はすこと甚だしき此の如し。讚辭褒辭の人を迷はすこと甚だしき此の如し。歴史や、讚辭や名譽や榮達や、皆これ粉飾のみ、假面のみ。人はこれを脱し、これを超越せざるべからず。

歴史は虚偽なり。

●ブックウオーム

學者の本領は多く知るに存せず。又、たゞ研究することに止まらず。これを知り、これを究むるは、獨創を幫助せむが爲のみ。發明を幫助せむが爲のみ。若し、たゞ汎く知り、深く究め、その知識研究を纏めて『私はこれだけの研究をし、これだけの知識があります。』と言ふだけならば、吾人はこれをブックウオームとして排斥せざるべからず。

●理責めの合點は駄目なり

科學はよく證明し、否定し、肯定し、人をして合點せしむ。而して、その證明すること能はざるもの、否定し難きもの、肯定することを得ざるも

歴史を葬らば、ブックウオーム、理責の合點は駄目なり